西國三十三所名所圖會 九

西國三十三所名所圖會巻之七目錄

吉野山中續

雨師獏観音堂　瀧櫻　雲井櫻　中院谷　花櫻
横川覺乾首墳　世尊寺古趾　金峯山寺古鐘　龍返　山伏匿
子守神社　栄燈臺　結燈臺　湯釜　祭礼畧式　瘡神祠　辰々尾　人丸墳
吉野山行者　牛頭天王社　二之鳥居　高筥遺像堂
躑躅ヶ岡　遥谷　岩倉谷　金精社　高城山
安禪寺　本堂　鐘楼　持佛堂　尹宝塔　奥院秘佛堂　蹴抜塔古趾
苔清水　大峯山上道　西行庵古趾　櫻木明神社　青根我峯
象小川假寝橋　夏實川　花篭清水　御船山　象山
柴橋　清河原　樋河原　大河野邊　宮瀧　瀧飛
水分山　水分神社　丹治川　幣掛神祠
猪養山　女背山　櫻之渡　本善寺
宇治間山

千股溪　待場嶺　龍在城趾　冬野　四軒茶屋

孝武峯　本社　十三層塔　常行堂　山王社　末社　講堂　總社　讃摩堂　宝庫
灌頂堂　本願堂　輪蔵　鐘撞　菴羅樹　温室　女人遥拝殿　什宝大畧
大織冠像　紅葉洞　荒神山　西門
定惠塔　沖海公墓　如覚塚　東門
氣都和既神社　細川山　紫蓋寺　增賀上人墳
細川瀬　毘沙門堂　氷室古趾　御陵山
勾池　真名池　島宮　南淵漢人墓　浄御原　石舞臺
南淵山　金剛寺旧趾　龍福寺　竹野王塔　飛鳥川上神社
都墳　加夜奈留美神社　胞衣墳　産湯井　盟墳
大仁保祠　陽石

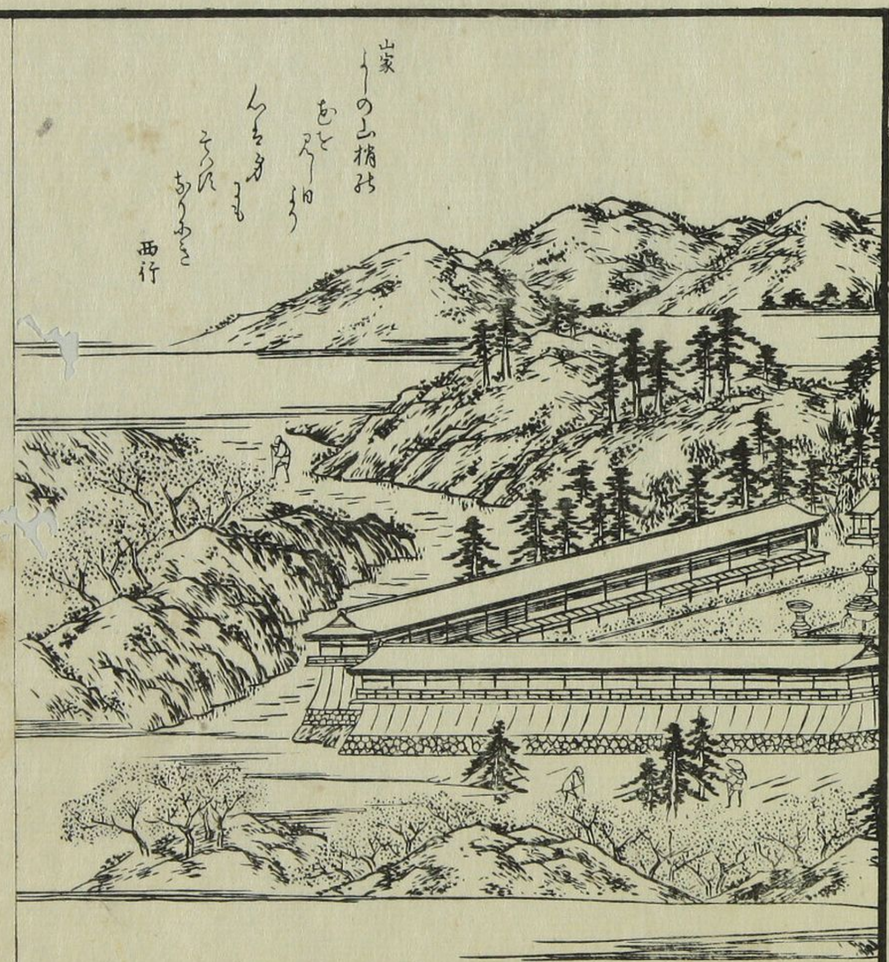
○

第七番東光山岡寺　本堂　開山堂　聖天堂　観音堂　弁天堂　納札所
瑠璃井　八大龍王祠　弥勤窟　什宝大畧
治田神社　逝田岡　酒槽岩　板蓋宮古趾
川原寺廃跡　川原宮古趾　橘寺　本堂　観音堂　春日神社
石燈籠　墨染桜　三光石　瑪瑙石　大師碑　弁天祠　畝割墳
右近橘　左近桜
鬼厠　鬼俎　倭産命墓　天王社　亀石
欽明天皇陵　御猿石　文武天皇陵

猶隈川　於美阿志神社　櫛玉神社　真弓岡陵
佐太岡　再出　許世都比古神社　越野　越の大野　齊明天皇陵
越智城趾　外墳陵　石椋神社
牟佐坐神社　益田池碑趾　宣化天皇陵
軽池　軽寺廃趾　天武天皇陵
豊明宮古趾　曲峡宮古趾　軽路　軽市
境原宮古趾

後醍醐帝の御製ふ
まえて五月雨なかなかに
晴まほしうらうらふ
ちらくを最つみ〻も
尊かりしぞ

子守社


山家
西行

雨師夢遠観音堂　梵天社と過て子守の社に至る道の右の傍にいと世に模の観音堂

後醍醐天皇御幸ありしに観音堂の辺まで渡せおはしましに空の雲いつもいつもくもりて又うさ曇りて篠とつくが如くに出れば御堂に暫らく立休らせおはして。うゝ猶丹生の社に程近く祈ゝ晴ゝ五月雨の空。紙ド させおはしれば時ゝうて晴るゝ日影らゝん咸て夫より降ざりしを帝徳のつよゝ渡せ給へるとゝ人ゝ頼もしく思ひ給ふ。吉野拾遺見えり

四跡巡考ハ丹生の川上程近く有。丹生明神の社ハ此所より一里ばかり川下に有旱する時ハ丹生川上の神黒毛の馬と奉て霖雨する時ハ白馬と奉る事内例也

龍櫻　西の谷間に　見やるとて　吉野紀行

雲井櫻　西の高根に　見ゆると云

布引櫻　道の左右並木のさくらとて

いくもれば雲ゐ波ぬきの滝さくらゝ花は波さらこそ吉野の山　飛鳥井雅章

同　御階さし押ひやられ〳〵回ト名の雪ゝ丹ゝもゝ吉野山　仝

中院谷　**花矢倉**　此下に禅定寺大将軍社清瀧権現社辻堂おはします中院谷義経匿れるひ古跡ひゝ花やぐゝ忠信ゝ矢射ゝ地もゝ聞ゆ

此谷ハ往昔文治元年冬十月延尉源義経鎌倉の追兵を避て主従十有余人當山の中院谷に匿き居のひしゝぶ吉野の衆徒ハ鎌倉への忠節の為とて廿日の暁より大鐘をつきて僧侶共あつめ既に中院谷に押よする故に佐藤四郎兵衛忠信一人此に踏くゝまり主従十六人を落し給へる法

義経記

義経今ハ逆ふのびさせ給ふゝんと思ひ忠信ハゝつゝぎゝ結ひの直垂り

郷威の甲白星の冑の緒をしめ冑ハ経次海云ふ傳りしるたゞら井と云太刀

三尺五寸ありしを判官より給へる黄金作の太刀を佩副へ大中黒の二十四

さゝれる上矢ハ青ゝ白鏑の目ゝ下ハ寸ばかり有る大の蟇股をげて佐藤の家

に傳つて差ゝるれば〳〵ちぐ〳〵の羽を以て刻ゞる一中指と何きの矢より一寸許

出して差ゝうると頭高ゝ貫臣ゝ木の弓の桑みぢゝく射ゝげると携手勢

七人中院の東谷に止まて雪の山と高くつきて楪榊葉を散ゝに切刺く前ゝハ

大木と五六本捕ゝうて楚の大衆二三百と今や〳〵ぞ待ゝうゝ西の

時ばかりに大衆三百人ばかり谷とゞて押ゝせ同音小鯨波をぞ作ゝる七人も

向ひの杉山の中より出ゝ鯨波合せゝ扱ゝて歇ゝに有ゝ知きれ甘日ハ

修行の代宜に河倉法師とて悪僧いうまを寄りの先陣をぞしうる法師
もれぐも尋常に出立うう萌黄の直垂に紫糸の鎧着て三枚冑の緒とりまんさい
佐々の太刀を佩き廿さ廿さたる石打の征矢を頭高うおい負て二所藤の弓眞中
ゝうて我ゝ劣ゝぬ悪僧五六人前後に歩ませて正先ゝ見ゝる法師ハ四十ぞろゝり
見ゝるゞ褐衣の直垂に黒草威の腹巻黒漆の太刀をゝき推木の四枚揃とつを
矢ざろゝぞ寄ゝうる川倉の法眼揃の面ゝ進ゝ出ゝく大音上て申るハ抑此ハ
鎌倉殿の御弟判宜ゞゝ渡ゝせゆひ〻ゝ義つゝ吉野の修行ゝて罷り
対ひ候へ私等ハ何の遺恨も候〻ハ一先落させゆへ〻候ゝ又討死ゝうをゝ
候へんゝ御前に進ゝゝ御ゝゝ候能やゝに申され候へ哉ゝ賢ゝゝげゝ申し
ゝゝをゝ四郎兵衛ゝをゝと聞てゝゝ事も恐ゝや清和天皇の御末九郎判宜ゞの
の御渡ゝゝハ今迫御辺達ハ知らざるゝ日来ゝゝみゝるハ汎い糸ゝせたゝんハ
何の苦ゝゝぞ假初の縁言ゝうて一端御兄弟の御中當時不和ゝおゝをれ
ゝも無実ゝんゝるゝ思召直ゝ給ゝざゝんゝうれ末の大事ゝゝ子細と對ゝて聞と

ゝ御使と何者ゝゝ思ゝゝん鎌足の内大臣の御末次海公の後嗣佐藤左衛門
憲高ゝハ孫信実の庄司ゞ二男四郎兵衛尉藤原忠信ゝゝ者之後ゝ論ぞるゝ慥ゝ
ゝけ吉野の小法師ゞゝゝぞ言ゝ川ゝ法眼是と聞ゝ賤ゝゝゝゝれゝゝ思て
悪所もきゝゝゝ谷ゞゝ喚ゝてぞかゝる忠信ゝゝきと見て六人の者ゝもゝゝひゝ言
ゝハ是等と近ゝゝて悪ゝゝ御辺達ハ是ゝて敵の問答をせゝ某中ざゝ二ゝに
弓持て細谷川の水上とゝゝて敵の後ゝゝ狙い鏑一ぞ限てゝてゝゝん揃実く
居ゝる悪僧ゞ首の骨ゝ押つけゝと一矢射て残る奴黨追ちし揃ゝて打ゝゝ
中院の峯に登ゝてきゝむゝて敵ゝ矢ゝ射尽ゝさせ味方も矢種の尽ゝハ太刀浅
ゝゝゝ大勢の中走ゝ入て切死に死〇やゝぞ申ゝる大将軍ゞゝゝゝれゝハ付ゝゝ若
黨も一人ゝゝて悪ゝゝる殘ゝの者ゝも申ゝるハ敵大勢ゝて候小仕損じのゝゝゝ
申ゝれゝハいゝのゝと見ゝゝゝく中指鏑矢一おゝゝゝゝて弓杖ゝゝ一番乃谷浅
走りゝゝゝて細谷川の水上とゝゝて敵の上ゝゝ小暗き所ゝゝ狙いゝて枝ハ
夜叉の頭のごゝゝゝゝゝ木ゝゝゝ登ゝて見れハ弓手にゝゝひつけて矢先ゝゝげゝぞ

見てとり是二人ぞと十二ぞこゝぜをうて打つゞい思ふさまゝ引つめ鏑
りとかゞ引けく暫しかゝあてひやゝ射る未強く遠鳴して揃つれる
悪僧の弓手の小脇と揃の板とをて射切蟇股へ手ゝとふ矢の下にかゞゝぞ
射倒しる大衆大こうされる所に忠信ものゝを敲ひておめく様ゝや者
ども勝に乗る大手へ進め搦手へ巡きや伊勢三郎熊井太郎就鳥尾備前へ
うれ左岡の八郎と西塔の武蔵坊もるさ渠奴ふがする採し影もあれ人と呼ろう
嗚ゝられバ川ゝの法眼是と聞て実や判官の御内へ是ホてそ手ゝも溜ゝぬ者ども
あれ矢ごろに近づき叶ふまゝて三方さゝぞ散々る云々

龍返 中院谷にいう横川の覚範忠信に古跡あり

横川覚範首塚 同所にいう覚範紀伊国の住人鈴木党の中にて横川前司覚範ともの上言

山伏石 同所にいう源義経此岩の背に匿るゝ

覚範追ひけむづと打ちちゞて伏木に大刀と打貫ぬき抜んゝとする隙に忠信三
段ぐろ千ゝと飛く捕のぞて見きバ下八四十丈ばかりある盤石もう是ぞ龍返し
ゝゝ人もむるぬ難所なり弓手も馬手も足の立途もる紀深き谷の面と對ぐさ

中院谷の龍返しに
覚範忠信小討る

やうもう〜敵の後に雲霞の如くに續きたり此て斬れおび敢ひく討きたるとぞ
言んなる彼所にて死さうび自害〜〜と言うんと思ひく草摺はらんで盤石よ
もうひ鬼声浅出〜〜く如うるを二丈ばかり飛落く岩のそぐ角に足ふみ直
冑の鞠ちーのあて見えび覚範も谷を覗きてそ立てうるを正もく見へさせ
ぞや返し合せるくやと申もそてび曳聲浅出して朝〜うるいぐ走〜うりん
運の極の悪〜さ〜草摺をとり木の角にうりけて真逆さまびぐ〜と轉び忠信
打物ひつさげく待所へのぼ〜と轉びてぞ来りる起上る所と以て開て丁ど
討太刀ハ聞ゆる寶物ちう腕強うり事を冑の正向をとと打破ぬ去や面伐
半ばうるぞ切付ぬ太刀をとりばかぞと伏に起ん〜〜あれども只よりふ
〜〜膝と押つく唯一聲うんどぐうり浅最期うく罪一をぞ死よけ所
或本ハ云思ふ所ふ切ふせく忠信ハ走ぐ休〜〜く押て首を掻落ー大刀乃
鋒ハ刺貫き中院の峯に上りて大の聲とりつく大衆の中にたの首
見知りたる者やうる音を聞〜〜覚範〜びとび義経〜とりたるぞ

門弟ひ〜〜ば取く孝頼せを取せん〜〜く雪の中つぞ投をてうり大衆ぬれと
見く覚範さうも叶ひび増く裁さをてあ〜〜んずばぞや搦をかえりく
後日の絵義をせん〜皆〜麓を飯ぬ〜〜

世尊寺古趾

獅〜尾坂の上〜〜此地ハ霊鷲山をひ〜〜きをて就鳥尾山をと田禄の後慶〜〜小堂
一宇ひ〜其古蹟の遺風もん〜後世比穂村現光寺の廃趾を禪刹と建て霊就鳥山
世尊寺〜号〜再興ハ
月清　鷲の山浄法ち庭をちる花ととり〜〜嵐の嵐ぞ月冴　後京極良経

金峯山寺古鐘

鐘銘跋曰　金峯山寺洪鐘保延六年十二月播磨守平朝臣忠盛施入熟銅七斤二百鋳成ス云云

右同所の上の方〜〜ひく俗〜土野三郎の鐘〜〜其来由詳ひ〜〜ハ金峯山寺ハ蔵王
堂の寺号あれハ此鐘貞和五年の五月火とのぐれ〜〜ものもぐ〜世尊寺の鐘〜ハひ〜〜ば

子守神社

世尊寺の古蹟ひ次く竈守〜〜云勝手社〜〜此所ぞ凡十八町余

祭神　三座　高皇彦尊　拷幡千々媛命　少名彦名命〜〜

又住吉同躰ち〜〜も云吉野八大神の甚一也或曰勝手と又神〜〜い子守と母神〜〜云
田禄の後豊臣秀頼公再興〜〜て社壇美麗ひ拝殿の哥仙の額ハ
狩野永徳の筆〜〜湯釜柴燈臺ハ慶長中の銘ひ

社記〜〜云柳當社子守大明神ハ大峯の鎮守〜〜て山上隨一の神社〜是ハ依て

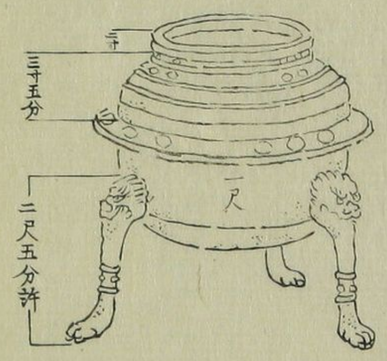
神前湯釜之圖 鐵を以て造る

銘曰 金峰山子守社湯釜

豐富朝臣秀頼郷再興

奉行 建部内匠頭

慶長九甲辰歲



惣高凡二尺九寸許

口径 一尺七寸余

同 柴燈之圖 鐵器

大小二基ノ

大ノ方 高凡 四尺四寸余

小ノ方 高凡 三尺六寸余

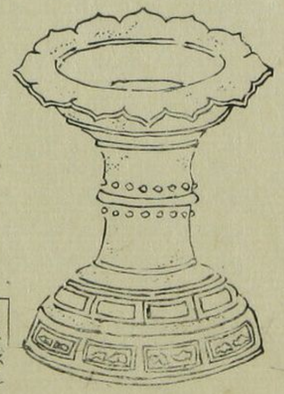
銘曰

金峯山子守社

豐富秀頼郷 再興御建立

奉行 建部内匠頭

慶長九甲辰歲 大工下田善左衛門尉云云



模様唐獅々二ツづゝ

大峯登山の行人ホ携ふる所の金剛杖も子守卅八社と申し崇め奉るなり子守卅八社と申奉る事ハ御子卅六神を生せの人故也子守ハ則子を守ると讀て子孫長久と祷らせのことぞ又當社の寶物に神作の牛馬の頭の形せ一有

毎年正月十八日御田植の神事又九月十九日例祭天下泰平五穀成就の御祈禱也

祭禮畧式

例歲九月十九日未明子守社の神主出勤して神輿に神躰を移し奉流辰之上刻より神輿出御と催し御迎太鼓 俗ニ蒲團太鼓ト云ノ也 右ふくん八何まもこ二重 吉野郷中より四番出る真言天台両流の僧徒學頭の坊まで御迎ひに出る斯て神輿下山の刹限に至れば僧徒宮の方に對ひて音樂を奏し稍て神輿渡御ハり神輿の前に僧徒列を正し音樂を奏し行後に子守神主勝手神主従者を平くられ従人次に町々在家乃主上下と着し供奉ハ凡真言宗一流の僧徒ハ上の學頭密乗院まで御迎ひに出天台宗一流の僧徒ハ勝手の社の傍まで御迎ひに出る是旧例也子守の神輿勝手乃社前ホ着ハ令して勝手の神輿も俱に出御ハりて二社ハ並て藏王堂に渡御あり

前勝手神輿後子守の神輿也　午の刻両神輿蔵王堂の前に着し二社相並ぶ是より祭禮儀式執行ひて

夜子の刻神輿両社へ還御あり

亢夜に入凡五尺許の結燈臺一對

燈臺の物は高サ五尺絣　至って簡古なり

蔵王堂の前に建翌朝まで是を燈す

用ゆる所の油の料一對にて二升二升是旧例也と云

但し九月十六日叡山の僧正天台の學頭の坊に着し當日まで滞留すと聞き

草根集　吹くぬく山の苔路の秋雨にみちてもろくね神ぞ　正徹

吉野紀行　こゝ聖地山姫とゝ称して多くの社をぞ　飛鳥井雅章

瘡神祠　子守の社より一丁半ばかり向ふにあり土人曰男女共に下の病あるものゝ祈誓願成就

駄一くゝ積上げ其形勢いと奇なり山神の類いなるべし

に至りて栄と七荷半奉納とゝ祠の前に杉葉を束ね荷栄の形ちし一荷に俵なりしもの

右瘡神より一丁半ばかり高箕上人の遺像を安置す

長凡四尺許

高箕上人遺像堂

高箕上人　後白河院の御脳悩加持し奉て直地に妙とひゝかせし大徳なり

又例年二月一日花供懺法の會式は此上人の始めなり也

吉野山行人の図

天台真言両流の若代僧今修行中は天台宗

吉水院真言方密乗院の正頭部家なり

竜門山中の諸神佛は毎夜子の刻なり凡

一里許山上の谷にて水を汲み蔵王権現

供に修行満ずれば浄衣を脱ぎ黒衣に

替るなり是より僧徒の位に昇進に修行

中の姿惣白衣浄衣白木の杖檀下駄五寸許の水

桶を肩にして紐を以て躰に結つけ嶮岨を往返

する事図のごとし尤同行の僧に往會しても言

かはらぬ世に所謂無言の行なり

往昔京洛七条ホ箔打ツ人ハ
金の御嶽の金ヒ穿ちくゝて
箔ヒうちて賣りし其箔毎ホ
小き文字ヲて金の御嶽〳〵と
ちぼ〳〵ヒ打ルヲ箔打ハ
此文字さらく見〳〵ぢ〳〵とやそ
捨兵遠使のせん兒ヲ合て一五十ヒ
白状し終て獄屋ヒ入れらるく
十日ばかり有て死ヒ箔ヲ
残らず金峯山ホ入て本の所ヒ
置ル〳〵結りつゝて夫〳〵して
人もちていく絆の金ヒ取んと
思ヒ大さ〳〵ヒもヒ宇治拾遺ヒ
見てこゝ是則ち神のつゝめ
ゆゑ所〳〵ぞ

釈通観

牛頭天王社　高蒐堂ヒつゞく吉野八大神の其一ツ　二の鳥居　牛頭天王社のつゞくヒ修行門も号ヒ

高城山　街道の左ヒ見る山ヒ俗ホ城山ヒ云天塔宮の城趾ヒ又文治中佐藤忠信虚腹ヒ切ル所も
此山ヒ〳〵言つゝ凡ヒ宮殿八坐ヒ云

萬葉
三〳〵所の高城ヒ山ヒ多ホ八沙さゝぐうてたゆびる月西

慈鎮

拾玉
高城山ヒ云ヒ若くそ引ヒれるをさもゝわ人ハ苦絃もせば

鄰躅ヶ岡　逆の谷　いづれも道の左ヒ見ル子守社の巽の方　岩倉谷　ちるの谷の西ヒ引ク左右ヒ相対せり　桜樹多し岩倉山万葉集出

金精大明神社　二の鳥居の向ヒ引ク延喜式神名帳曰　金峯神社　名神　大月次　新嘗
吉野山の地主神也故ヒ金御嶽の号ホ起ルトヱ　祭神の垂跡未詳
三代實録曰貞観元年正月廿七日甲申金峯神ヒ正二位ヒ授ケトヲ又同年八月從五位下行備後
権介藤原朝臣山蔭　外從五位下行陰陽権助兼阿波博士滋岳朝臣川人等ヒ遣ハして大和国吉野
郡の高山ヒおゝく祭礼戒修せ〳〵む又同五年二月ヒも吉野郡の高山ヒして祭事ヒ修ヒ是両度
もヒ蝗蟻五穀災害をるヒ禳ホの法ヒ引ク此祭事ヒ修せ〳〵ハ當社ヒやゝ〳〵ん〳〵則ち金峯山乃
鎮守ヒして吉野八大神の弟一ツト云

蹴抜塔古趾　金精の社の奥一丁ばかヒ有此切ヒの字ヒ隱家ホ〳〵文治元年源義経此塔の内ヒ
〳〵昔ハ五重の天塔ありし今塔の下の〳〵存せる覆ひの家根ヒまつ〳〵て
古跡ヒ七せ又世辺ヒ鎧掛松ホ〳〵ヒ　金精の社ヒ〳〵ヒ宝塔院ヒ号ハ本堂高欄の葱宝珠ハ鞍ヒて曰

飯高山安禅寺　吉野山安禅寺蔵王堂　秀頼郷再建　慶長九甲辰十月ヒ

本尊　蔵王権現　長一丈二尺行者役行者作　左　役優婆塞遺像　右　大黒天神

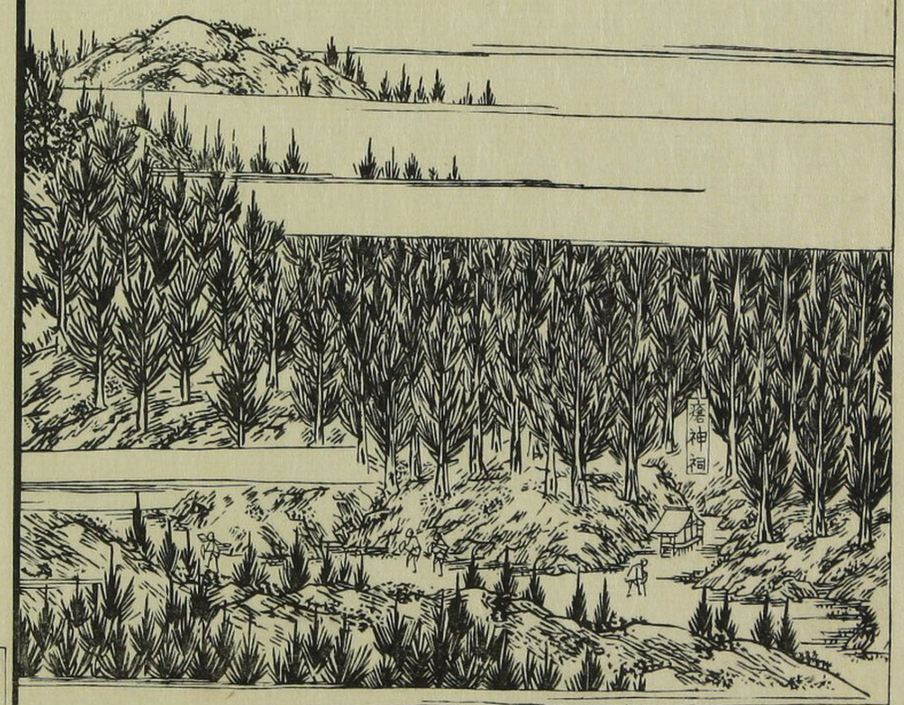
瘡神祠
高算上人遺像堂
牛頭天皇社

鄰躅ヶ間遥の谷
高城山おろしも
道の左に見やるこ

吉野紀行
はるばる来ぬるもまた
ふくはるばれば

はるばる去りぬの
花も
くれゐ井ぬ
つゝぶ
ふるさと
ゝゝもゝ

大納言雅章

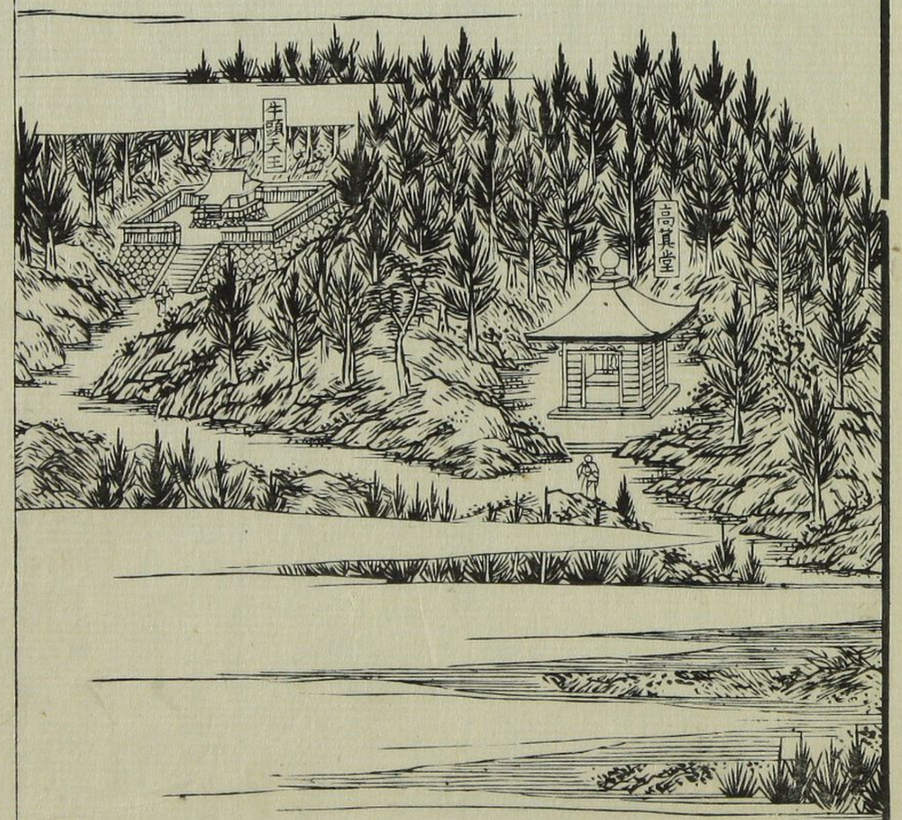


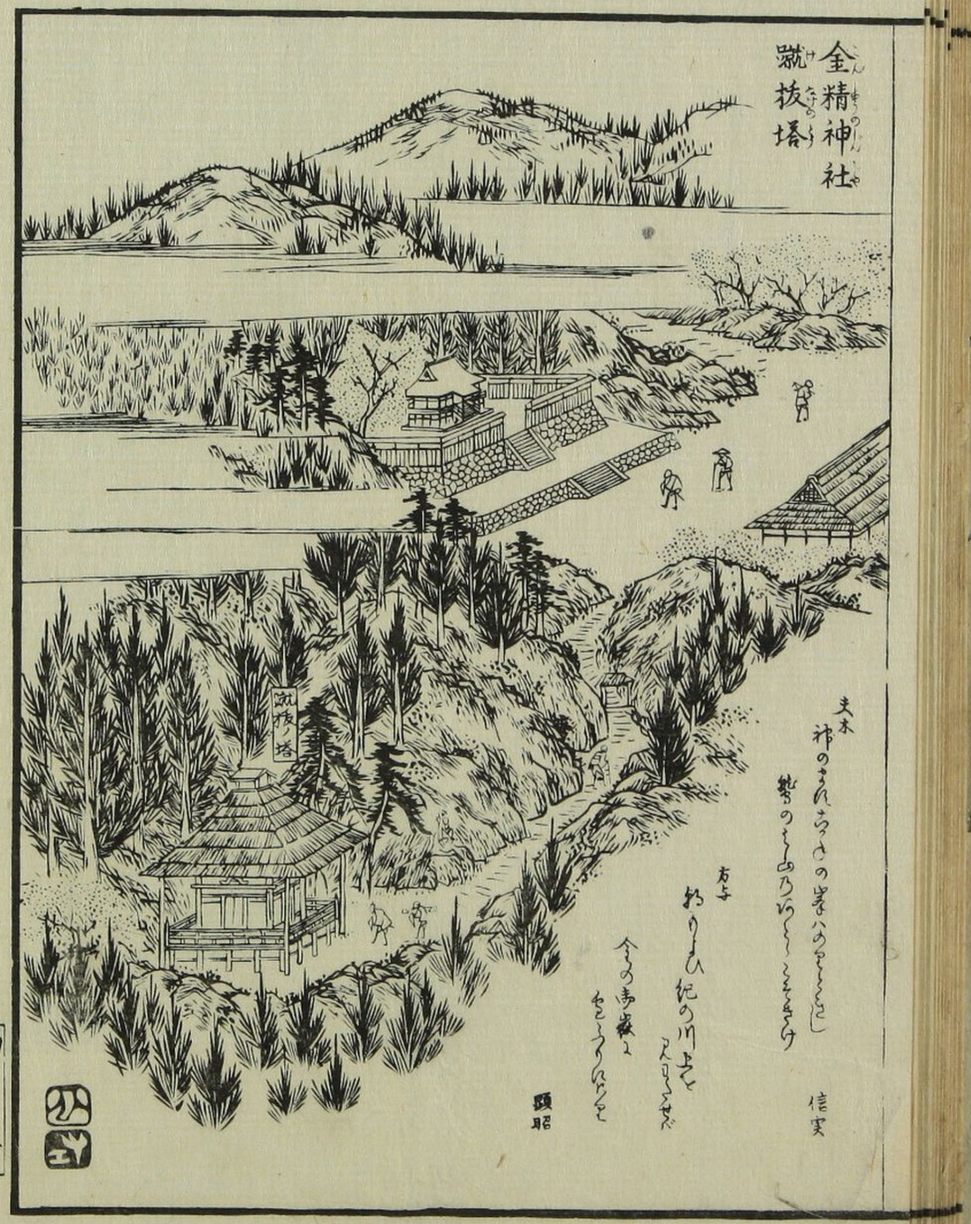
同

くるるの去ぬる去
ばりもそぶりれ
やうゝふくめば

るれば
くるるの
去の戸も
もゝこゝぶくゝ
くゝゝゝゝ
ゝ

仝





持佛堂 本堂の右の後にあり 愛染明王を安ず

鐘楼 本堂より半町ばかり手前にあり鐘楼の向ふに鎮守の社通の左にあらたに茶屋一軒あり此所大峯登山の道なり右へ安禪寺より西行の苔清水にいたる道すぐ右へ大峯山上通ちまより大峯道は女人禁制なり心嶮岨の難所にて行場と称する地多し一事ちがへば あれに墓ハ此所より大峯山上へ行程五里又勝手の社より此所まで行程五十町

奥院秘佛堂 安禪寺より二町ばかり奥にあり四方正面堂なり秘佛堂にして安ずる所未詳 尤予巡歴の時再興普請最中にして佛像他に遷して拜をえざりしなり

大和四跡幽考に曰奥院四方正面堂ハ聖觀音菩薩不動明王愛染明王地藏菩薩其脇に藏王堂ハ 當時所見堂の傍に未社の祠二ケ所并に休息所の類ひ一ケ所あり又大峯山開帳の砌ハ本尊と此堂まで下山し奉り諸人に拜禮せしむ故に平生の本尊ハ開帳の間寶塔院の持佛堂に遷し閉ぢ

青根我峯 安禪寺の上なる山とし此下に龍ヶ谷あり有義経落行の人時竹をたばねて向ふへ渡られし所あり又此東の谷に義経落行の人時竹をたばねて向ふへ渡られし所あり

萬葉 三芳野の青根我峯に蘿席雉将織経緯無二

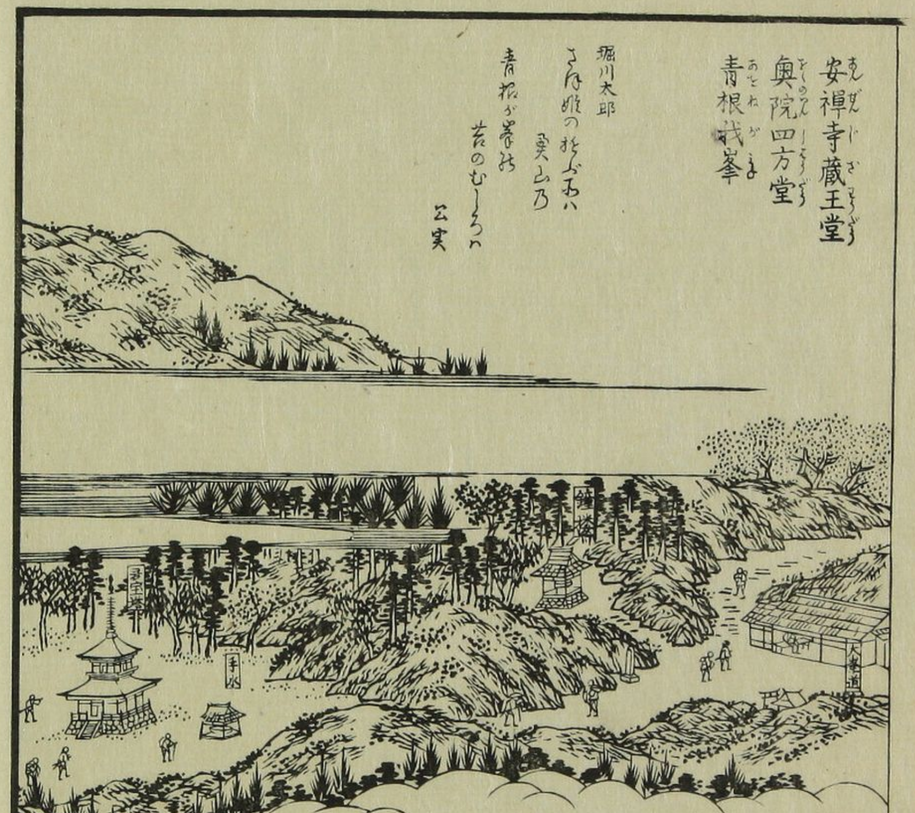
苔清水 奥院より二町ばかり奥にあり岩間をつたひ出る清水なり是より又二丁ばかり隔て奥ふ西行法師の庵室の古跡あり今尚庵をまもりて西行の像を安ず

山家集 ふかくもいりやくこむ人もなし苔の下道をたづねてをしる

吉野紀行 西行法師此山に三年のうちを住居せし所なり 花ちるをいと惜しるくも此所なるべし

安禪寺蔵王堂
奥院四方堂
青根峯

堀川太郎
さゝ波の枝ぶりハ
奥山乃
青根が峯の
苔のむしろハ
公実



苔清水の道まるく石ハ鐘楼の下ニ有り
六角ニ作りて正面ハ西行古跡ー記ハ
余五面毎ニ戯奇歩々と鏡ーて曰

ちーの山 変れ行くすゑぞあやぶまれ
花乃あゞきとてうゝぞそゝ
耳九

いゝくとむる
そゞ〇よ
苔清水
蘭岳

ありのんすゝせー 居ゝゝ
いくらも見ゝぬ苔清水かな
出麻呂

あれ乃流れを汲ん苔清水
ちまこうゐの花ーゝぐん
仲友

奥北山奥まで
すんゝせ
碓氷

花のあゝ内ハ
ちと大物ちう

新撰
芳野川
さゝ波の波ゝ
ちる花や
青根ら谷ゝ
きゝ
ちゝ手
頼政

南都百首
苔むしろ
きゝく落れる
さゝ波ハ
青根が峯ゝ
ちるさくら
久成

後成恩寺関白

苔清水

夜もしくらうちに
浮世をすゝがばや

たえせぬ泉の水をくみて結て
近世清水のかゞのあ中ゆきり
柿山翁出之

南都百首
みよしのや岩ゐの
苔の下むすとても
苔のしたに
袖ハぬれなん
後成恩寺関白

芳山之奥寂禅心
無聴苔泉滴々音
何事浅斟和足意
西公去後没人斟
荒井公廉廉平

くくはうて思ひしられぬ吉野山やがて出じと思ひしのみ　飛鳥井雅章

泊船集
むかしより名くの奥になつかしくは山深く白雲峯にかさなり烟雨谷を埋んで山賤の家ところところにちいさく西ハ木を伐る音東ハひゞきた院乃鐘の声おのが谷の底にこたへ昔より此山に入て世を忘れたる人のおほくハ詩にのがれ哥にかくるゝぞや　いでや唐土の廬山といはんも又むべならずや
ある坊に一夜をかりて
碪うちて我にきかせよや坊が妻
西上人の草の庵のあとハ奥の院より右の方二町ばかりわけいる程柴人のかよふ道のみわづかに有てさかしき谷をへだてたるいとたうとし彼とくとくの清水ハむかしにかはらずとみえて今もとくとくと雫落ける
露とくとく心みに浮世すゝがばや　仝
若是扶桑に伯夷をらバかならず口をすゝがん若是許由に告ば耳をあらハん
凍とけて筆に汲干す清水哉　仝

西行庵室古趾
苔清水より二丁ばかり奥にあり今尚其かたちに庵を結びひろげる古跡のあとなりこれ凡一間半ばかり奥行一間ばかりの草屋あり西行上人の像を置なり長二尺八寸許の木像なり
とくとくと落る岩間の苔清水汲ほすほどもなき住居かな　しかし哥よみの人ハ大かたハこの西行の哥にあらぬも一向おなじ事なれど名高き人の上にハ後の世によからぬ事をいひ出て附會すること多し歟この西行の吉野でよまれたる哥ハ
よしの山やがて出じと思ふ身を花ちりなばと人や待らん　おもふにこそ実の西行の哥なれと尾崎氏一夕話に見ゆ

西行庵古跡

今西行ハ法師僧似雲の苔清水の奥に住ると
住りしかとも
ト時人傳へ見へくれ
此庵ハ近世似雲
法師か住る趾なるへし

住そうん
秋ハ
ふもとの
さくら山
ちハ
ゝみく
あけ
下方
似雲

櫻木明神社

喜佐谷村にあり林中の樹木枝幹ともに疱瘡の發せ如く見ゆるのあり俗にいへ明神ホ祈塗とかくれ疱瘡戒かるこもさしめ故に神木人にかりて疱瘡とつくとなくるの宮〻〻疱瘡除の守と出る按に神德のいらさるあるハ量るへからすもとめく祈る者の信にゝるべし樹木の説ハ風土のあれ所にて世にか体類ひの事明らかなるべし

吉野記　櫻木の宮ハ宮籠のかゝらゝに見つゝ花のゝ〻きも瀧の糸りて織出たるやゝ

艷に見なしうちそゝく吉野山　櫻木ゆみや　飛鳥井雅章

象山

同村にあり象の中山ともいふ

萬葉集出

新續古今　ひさもかゝて幾秋風を契るらん象山うゑけ木の下しせ　順德院

夫木　大和路に紙ごき乃ハたくてけり象乃中やゝ乃き乃ゝ　行家

仝　芳野山青根ヶ嶽に月すゝ象社小川に玉ぞ志づる　知海

仝　櫻ゆ名と名ゝ〻ゝ〻ゝ少人の行ハ爰路ゝつ志ゝに　惠慶法師

象小川

同上水源青根嶽より流れて吉野川へ

象橋とナゝて吉野川へ

假寢橋

一名外象橋　同所にあり

夏實川

喜佐谷の上の方菜摘村にあり吉野川なれ共

萬葉集ハ夏身之河とも有

萬葉　吉野雨有夏實之河乃川余杼雨鴨曽鳴成山影雨之氏　湯原王

往昔ハ菜摘川の神事にて毎年正月七日勝手社の神人ちゝび氏の男女六の川辺に至り若菜を摘て勝手明神に供ゝ祭祀を成ハ故に菜摘川とゝゝぞ然れ〻も

今此事絶て亡又花篭明神と号せる生土神あり花篭の清水といふ名水もこゝに有

御船山

古哥に詠る日ぐらし野も此里にあり傳云文治年間静女曾て此に匿栖といふ

菜摘村の東南にあり外より見れば山の形船のごとし故に号く坂路ありて嶮岨なり蔵王堂の鳥居のかたより東の方に見ゆる俗に舟岡山とも云

萬葉　瀧上之三船乃山尓居雲乃常将有等我不念久尓

宮瀧

宮瀧村にあり谷水の瀧にあらず吉野川の水上にして両岸に大岩ありて屏風を立るがごとし其の廣さ三間ばかり大河こゝに至つてせまれる故に河水甚だ深し水練を得し里人岸の上より凡五間ばかりも水底に飛入て川下におよぎ出て人に見せ銭をこふこれを瀧とびといふ旅客こゝに至りてこれを見物とす

此地は古の名所にして寛平法皇もこゝに御幸ましまして御製あり菅公御供ありて詠じ哥且菅家御紀にあり又南朝将軍宮吉野川にて鵜飼せさせ御覧の時左衛門尉康方宮の瀧の辺にいたりて鱸鯉等を得て進らせし事吉野拾遺に見えたり

山家集　瀬をはやみ宮瀧川を渡りゆけば心の底のすむ心地する　西行

新六帖　何となく波はかゝれど宮瀧や鵜のゐる石はおもくぞかはれぬ　行家

柴橋

宮瀧の流れに架して其巖より松の木をわたして打並べ同枝をとりて横にわたしつゝ松葉を布て土を置ちぎりて土橋とする也雅なる俗に簀橋といふ長サ凡二間ばかり也

清河原

同所の東といふ　万葉集に出

樋口河原　清河原のかみといふあり

大河野辺　宮瀧の東にあり　古哥に詠て

幣掛神祠

是は千本のかたより青根が峯への分れ道七曲坂を下りて丹治村に出る道の左に有

林中の小祠にして許多の四手をかけたり傍に農家一軒あり

水分山

四手かけの社より下る道の右五町ばかりにありこの代やありけん洪水にあらはれて余年砂をおほきり水分山とも云

萬葉　神佐振磐根己凝敷三芳野之水分山乎見者悲毛

吉野水分神社

千本の森吉野川のわたり丹治村にあり古は水分山に坐せしが中年洪水にて山くずれ神社の地もやぶれしかば故にこの地に遷したまへり毎年四月吉野山より僧徒来りて社前において楽あり云

續日本紀曰天之真宗豊祖父天皇文武二年夏四月戊午奉馬于芳野水分峯神祈雨也云々

又三代実録延喜式神名帳に出

丹治川

水源吉野山より出て丹治を経て吉野川に入

本善寺

六雄山と号す飯貝村にあり親鸞聖人八世蓮如上人の建立なり京師西本願寺に属す蓮如上人真像あり背面の記曰　吉野郡飯貝郷本善寺常住物明應七年二月實如書判と見へたり蓮如上人の墓は本堂より二丁ばかり山の方にあり新建の碑あり飯貝は吉野川の南岸にて北岸は上市村也　吉野より飯貝まで凡五十丁余あり

芳野山むかしながるゝ川づらに住ても見ぞやちかき飯貝　蓮如上人

猪養山

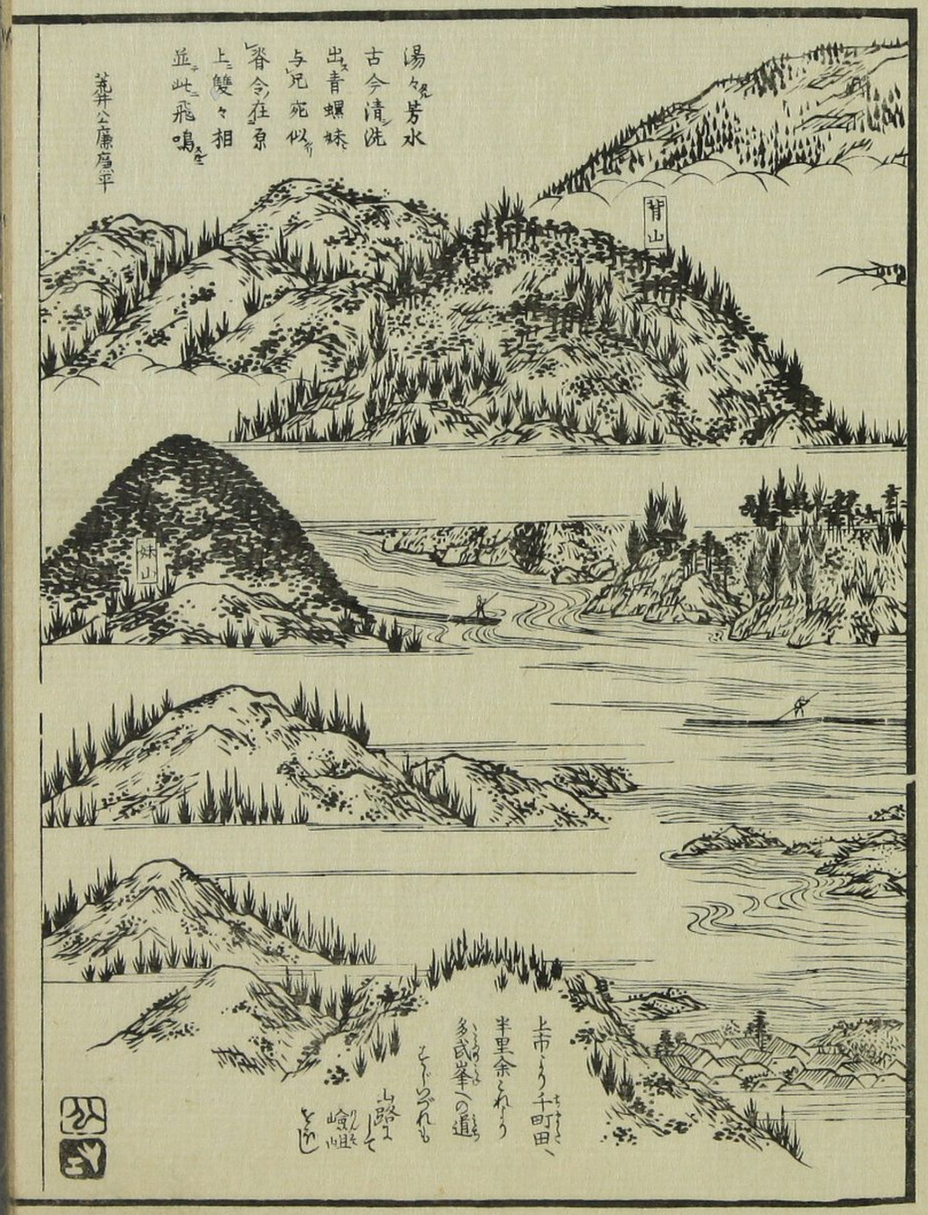
飯貝村の上の方也万葉集に吉名張乃猪養の山と詠り又猪養の岡とも有

妹背山

上市の河岸より水上を望めば右に背山といひ左に妹山といふ一説に背山のふもとあらはれて今はもとの名をまぎるゝ土人の教ゆるに任せて眺望す

流ては妹背の山の中に落る吉野の川のよしや世中　讀人不知

此所を桜の渡しとも
春より秋迄八舟ことく
久くみいれば
摘とらくること
曷のごし



湯々たる芳水
古今清洗
出る青螺妹
与兄死似
脊令在原
上雙々相
並此飛鳴

菊井公廉画平

上市より千町田
半里余くれう
多武峯への道
そゝりたれも
山路にて
嶮嶮

和州巡覽紀曰上市より龍門の谷の中に入此地の河辺の西方に河戸と妹背山とを西山
ゆり飯貝の方にあると背山とを西あり古城の形ち見る龍門の方にあると妹山とを
東ゆり是八茂山あり妹山背山ともに高く同一大とも山ゆり川戸隔て西山相対
て西山の間と吉野川あり妹背山八名所もり古哥多し

宇治間山 上市の里より半里余千股村小ゆり在中にて長一生土神西社ゆりて上宮下宮と云
千股より龍の畑迄至ること凡二里許○千股村の端より同寺多武峰本の分道より同寺以至る八左へ
ゆて芋が峠とゆると打ち一岡の町小ゆづる又多武峰にいくるもの八右へゆて龍在待塲峠と歴て冬野へ
至て多武峰にゆづる也 宇治間山万葉集出

千股溪 龍畑村より流れ出る千股上市浅経て吉野川へ入瀧の畑より龍在にいたる山路と云て左
瀧のもぐまゆり瀧の畑の名ゆに散るもの
瀧の畑より十八丁登り龍在にあり龍在待塲峠
瀧の畑の出村にて農家四軒ゆり有

待塲峠

冬野 龍在より北丁余にゆり俗に四軒茶屋と云是より多武の峰まで凡八丁往昔ゆに冬野寺と云有
又舒明帝とゆに葬り奉て清谷岡の陵も此地にて今清谷と云
十市郡ゆり峯たゆ聳峯にて幽邃の地もり 此地高市郡也

多武峰 田身嶺 日本紀 大塹 同上 談峯 縁紀

多牟 法華験紀 談武 増賀夢紀 一名五臺山又龍岳又談山

多牟 方子集 小多ゆて法い山は時多ゆ多乃森ゆきゆ多 肥後

夫多武峯 釈書に五臺山と書て東八伊勢の高山西八金剛山南八金峯山北を
大神山中央に談峯ゆり是神仙の霊崛にて中華の五岳に異もゆ

大明一統志曰五臺山在五臺懸東北一百四十里環五百餘里五峯高出雲
表頂皆積土因謂之臺世傳北方有文殊師利所居之地曰清涼山者即此也
臺分東西南北中寺宇壮麗云

談山妙楽寺護國院 一聖霊院とも云僧院四十余宇ゆて女人結界の地也故に門外に女人通有て婦女
徒に尚この山に登りて遥拝とする也

本社 談山權現 所祭 贈太政大臣正一位藤原朝臣鎌足公

左 定恵和尚 鎌足公の長子也 右 淡海公 同二男 神階 正一位勲一等 不比等也 又延長四年談山權現の勅号かゆ

十三層大塔 定恵和尚唐土に在て清涼山の宝池塔を見るとかつてこれを模作らゆ
本社の西の方にゆり治承元年再興ゆ云

常行堂 大塔の西の方にゆり右大臣伊尹公創建 **山王社** 常行堂左の傍に有

講堂 観世音と安ゆ左右二天王と置て 大塔の下の方にゆり本尊弥陀佛 **總社** 講堂の左の傍にゆり

寶庫 本社の東傍に有 **灌頂堂** 本社の巽の下の方にゆり 大日如来と安ゆ 大日如来と安ゆ 普賢 普建 **未社** 四神山王社の左右ゆ

輪蔵 二の鳥居の左の方にゆり表傳大士乗 **護摩堂** 惣社の南に有観世音愛法不動と安ゆ

菴羅樹 表 釈迦 文殊 普賢と安ゆ 本社の右の傍にゆり 定恵和尚唐土将来云 **温室** 輪蔵の巽ゆり大納言経輔卿大蔵卿 藤原長房 法施を所もり云

拝殿 定恵和尚の創建 **鐘楼** 本願堂の傍にゆり

柳當山八大織冠鎌足公の長子定恵和尚の創建 正殿の四圍八廻廊楼門

拝殿ゆり美麗の壮観ゆり其余堂塔神社境内に列て僧坊四十余院覆て

並て結構す。摩尼輪塔牛石ホハ東口に出る道傍ホにあり

家傳曰内大臣。諱鎌足字中郎。大倭國高市郡人也。其先出自天兒屋根命。世掌天地之祭。相和人神之間。仍命其氏曰中臣。羨氣古郷之長子也。母曰大伴夫人。大臣以豊御食姫天皇（推古）廿二年歳次甲戌生於藤原之第。大臣在孕而哭聲聞於外。十有二月子誕。外祖母語夫人曰。汝兒懐姙之月。與常人異。凡之子必有神功。夫人心異之。孕誕无苦。不覺安生。大臣性仁孝聰明。叡哲玄鑒。深遠幼年好學博涉書傳。每讀太公六韜。未嘗不反覆誦之。為人偉雅。風姿特秀。前看若偃。後見如伏。或語云。雄壯丈夫二人。恒從公行也（中略）

冬十月（天智八年）稍纏沉痾。遂至大漸。帝臨私第。親問所患。請命上帝。求効翌日。而誓願无徴。病患弥重。即詔曰。若有所思。便可以聞。大臣對曰。臣既不敏。敢當何言。但其葬事。願用軽易。生則无益於軍國。死何有勞於百姓。即卧復无言矣。帝哽咽悲不自勝。即時還宮。遣東宮皇太

弟。就其家。詔曰。邇思前代。執政之臣。時時世世。非一二耳。而計勞授能。不足比公。非但朕寵。亦身而已。後嗣帝王。實惠汝子孫。不忘不遺。廣厚酬答。頃聞病重。朕意弥軫。作汝可得之任。仍授大織冠。以任内大臣。改姓為藤原朝臣。十六日辛酉薨。于淡海之第。時年五十有六云云

（天皇甚悼惜。又大臣家ホ幸。大錦上藤我赤兄に命して恩詔を奉宣。金香爐を賜へ）

當山を談山と號る事ハ中大兄皇子（天智天皇）と鎌足大連と心を一つにして逆臣入鹿を討喪さんと皇子と時く此地に登て藤の花の下にて平天下の謀計をひそかに談ひしに故に其峯を呼ぐ談山とも談の峯とも號け又談武峯とも称ぶ也

又龍岳とも此山の形と音石峯とも眺望せバ龍の起立て左と見るる頭腹さるぐ尾足ぐ〳〵様にもん侍まバ此名ありぐ〳〵ぞ（縁紀）

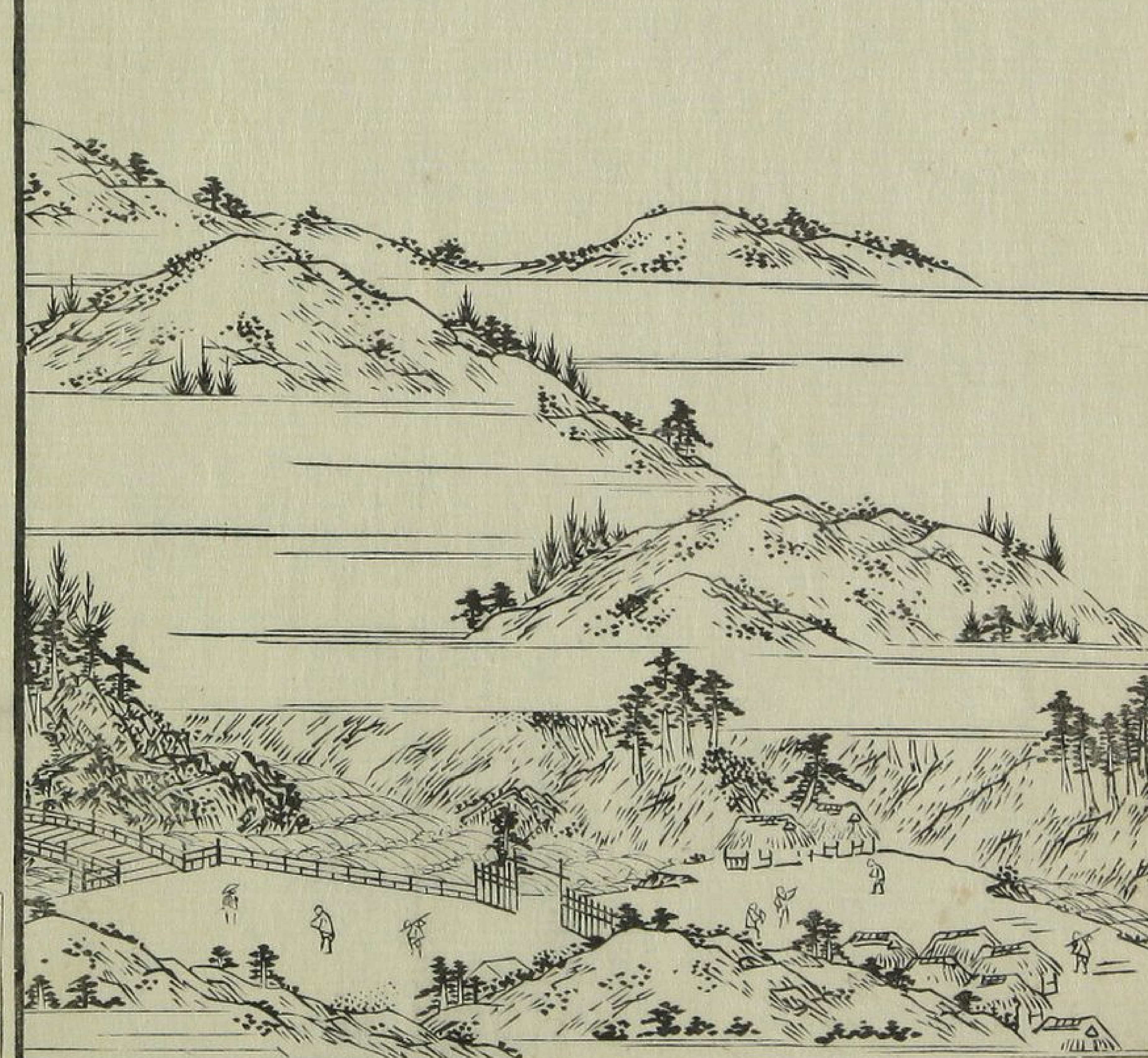
十三層塔ハ定恵和尚の草創にて此寺の始もの即地后に大織冠の遺骨を納ぐ抑此塔ハ定恵和尚白雉四年に唐土に渡て習學のぐもぐ〳〵清涼山寶池院の十三層の塔を摸し造て帰朝の船に積のひしぐも塔材繁多にて一層ハ唐土に

談武峰婦人遥拜殿
當山ハ女人禁制の地
なれども西の總門の外ゝ
女人道いとゝ坂路と
登り此方の山上ゝいたる
此則ち本社の正面に對ひて
二丁ばかりとぼし地方ゝて
婦人遥拜殿なり
談武峰

正面ゝ婦人遥拜殿の
額し掲く
かゝるに桜の樹
鮮多いりて
花の堺風景ゝ
俗家一軒いりて
此所ともなり
太祖峯の境内社頭
伽藍の壯觀美華もハ
いるも更なり桜堀の樹
鮮多いりて花ゝ
紅葉にして春秋の
眺望又ハ
我庵の淺ましもいん
妙ゝ風と妙ゝ
芭蕉

談山 東惣門

明應七年戊午夏五月上旬ヨリ和州多武峯大織冠ノ像破裂シテ頭ヨリ足ニ至レリ太タ怪異ナリトテ細川政元ヨリ筒井順盛ニ命セラル順盛彼山ニ郵リ大衆ニ法華経ヲ讀シメ祈祷ヲナセリト諸将軍傳ニ見エタリ

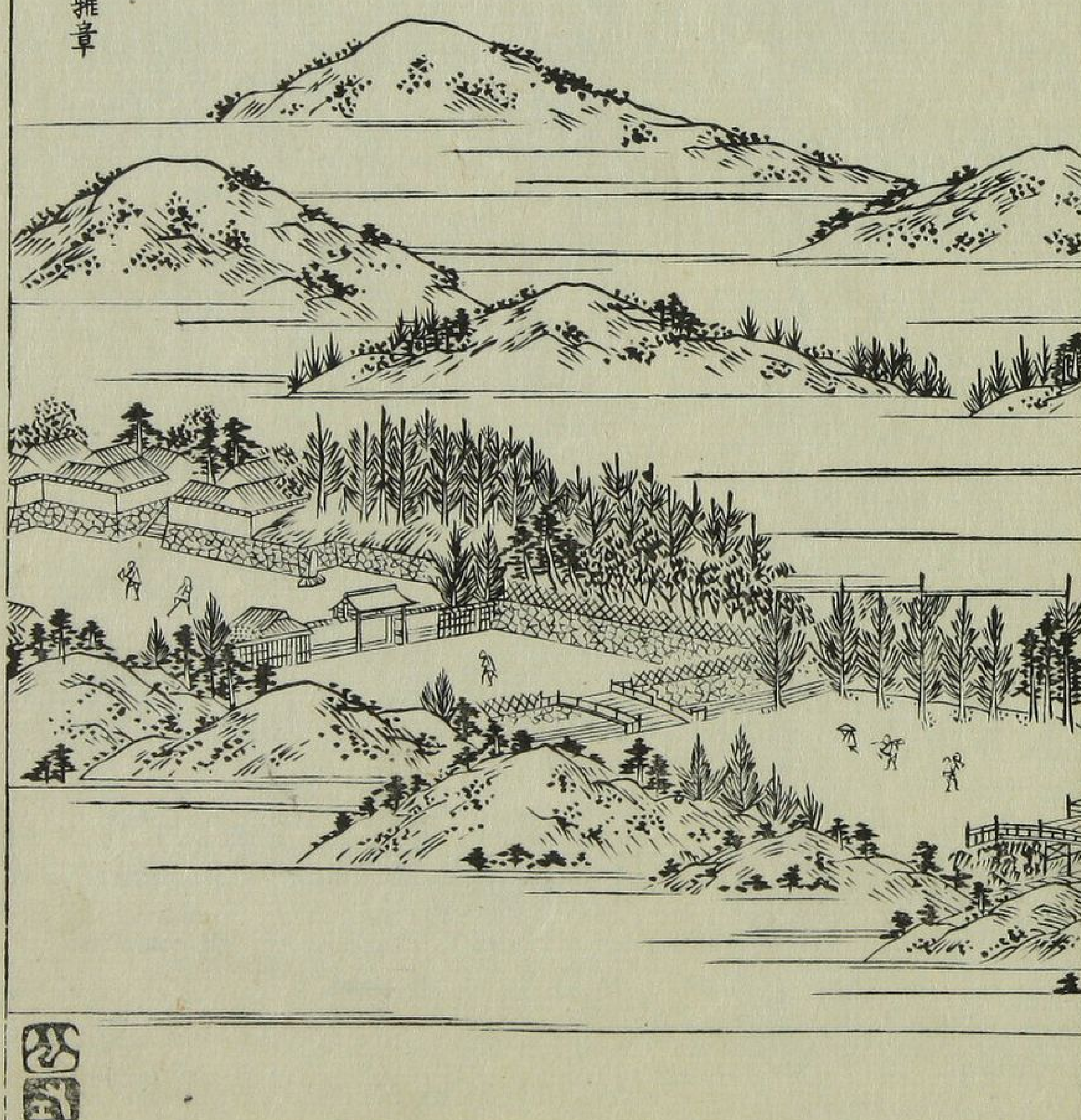


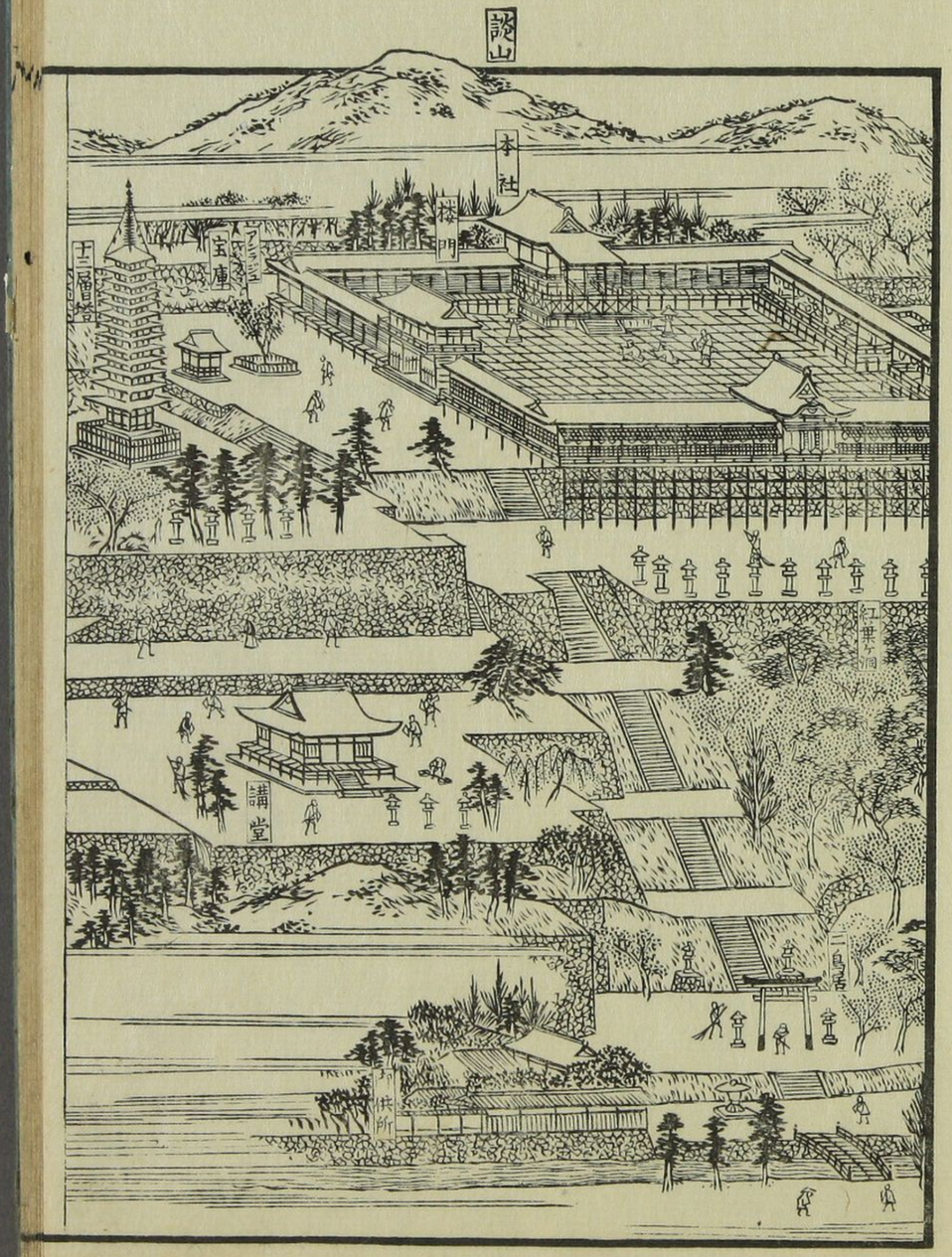
當山より長谷寺に詣づるには東門より倉橋へ下り桜井を経て追分へ出る也本道なれ

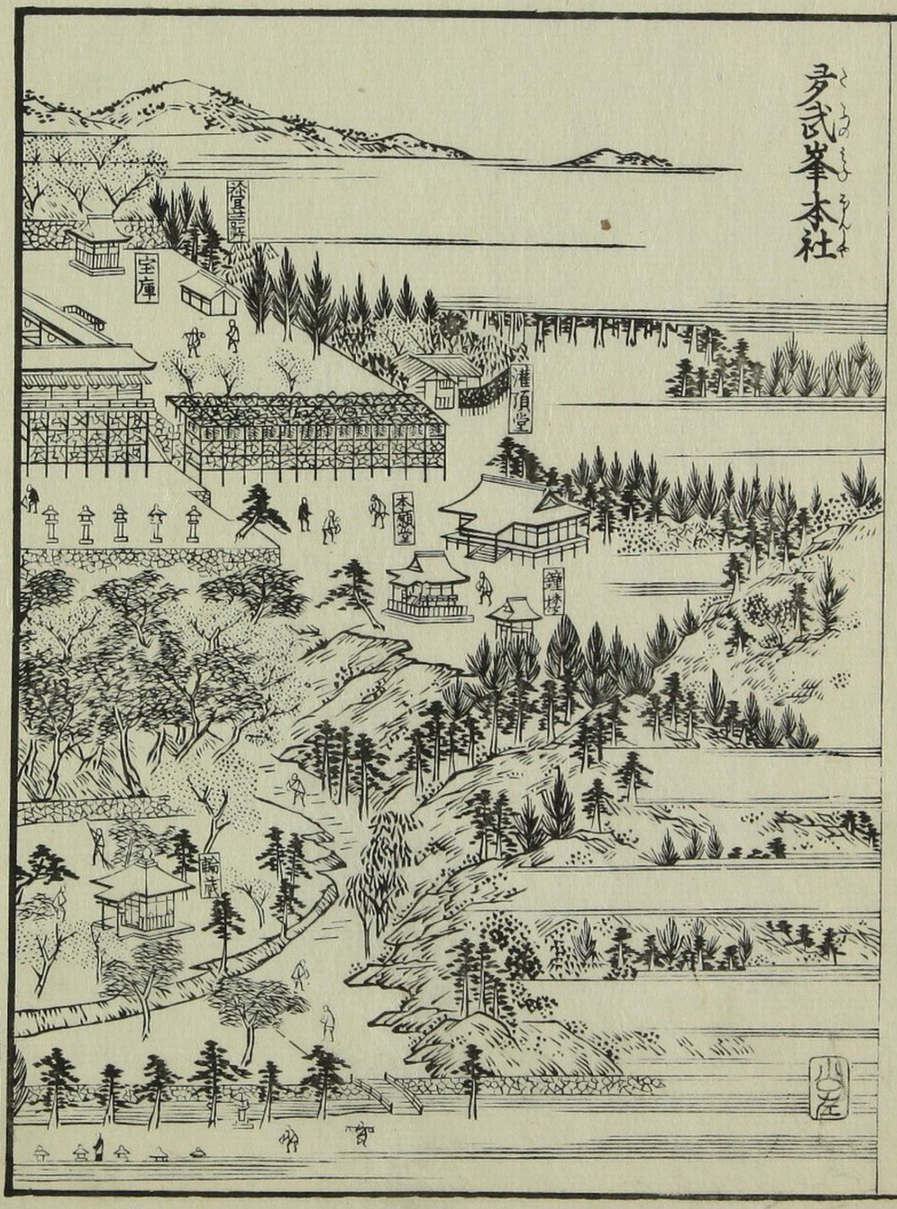
吉野紀行
多武峯にてよめる

峯の雲
ちるも桜の
[illegible]
吉野初瀬の
花の中道

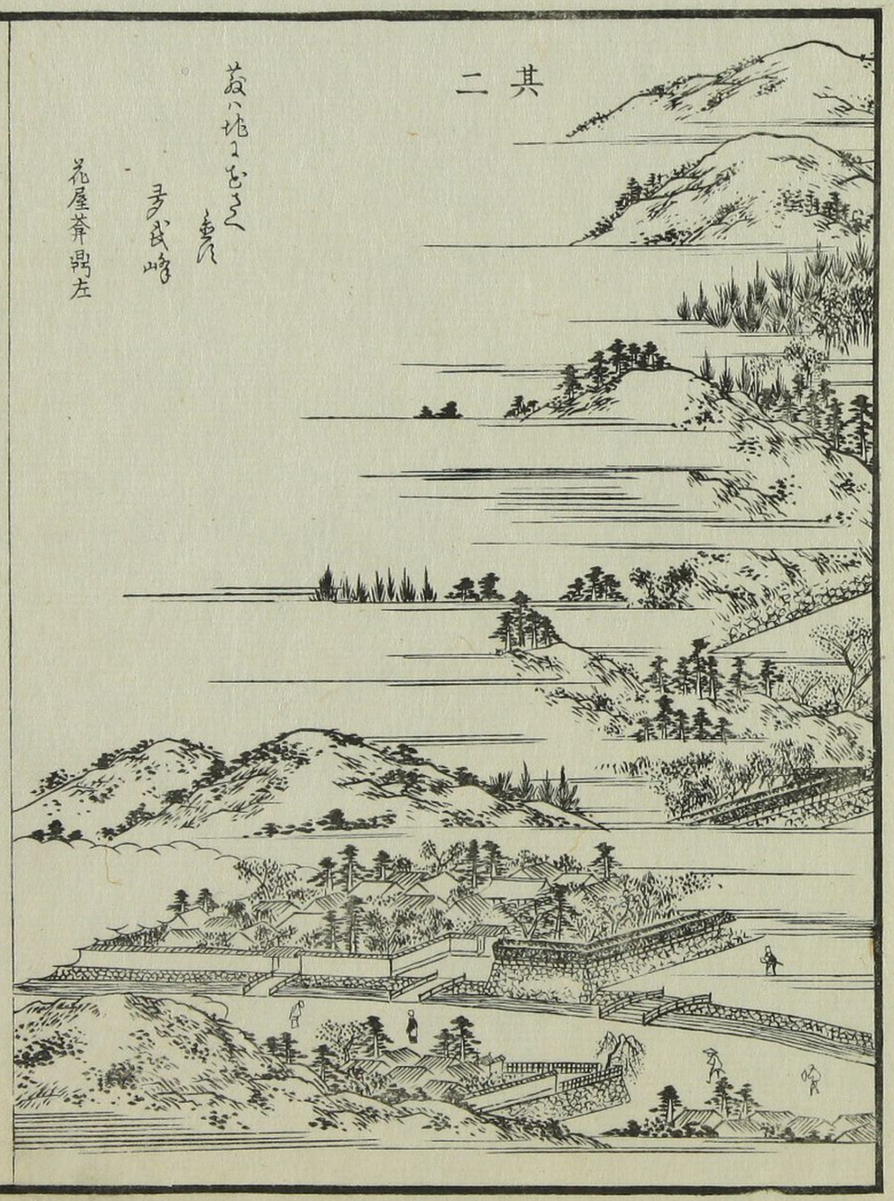
飛鳥井雅章



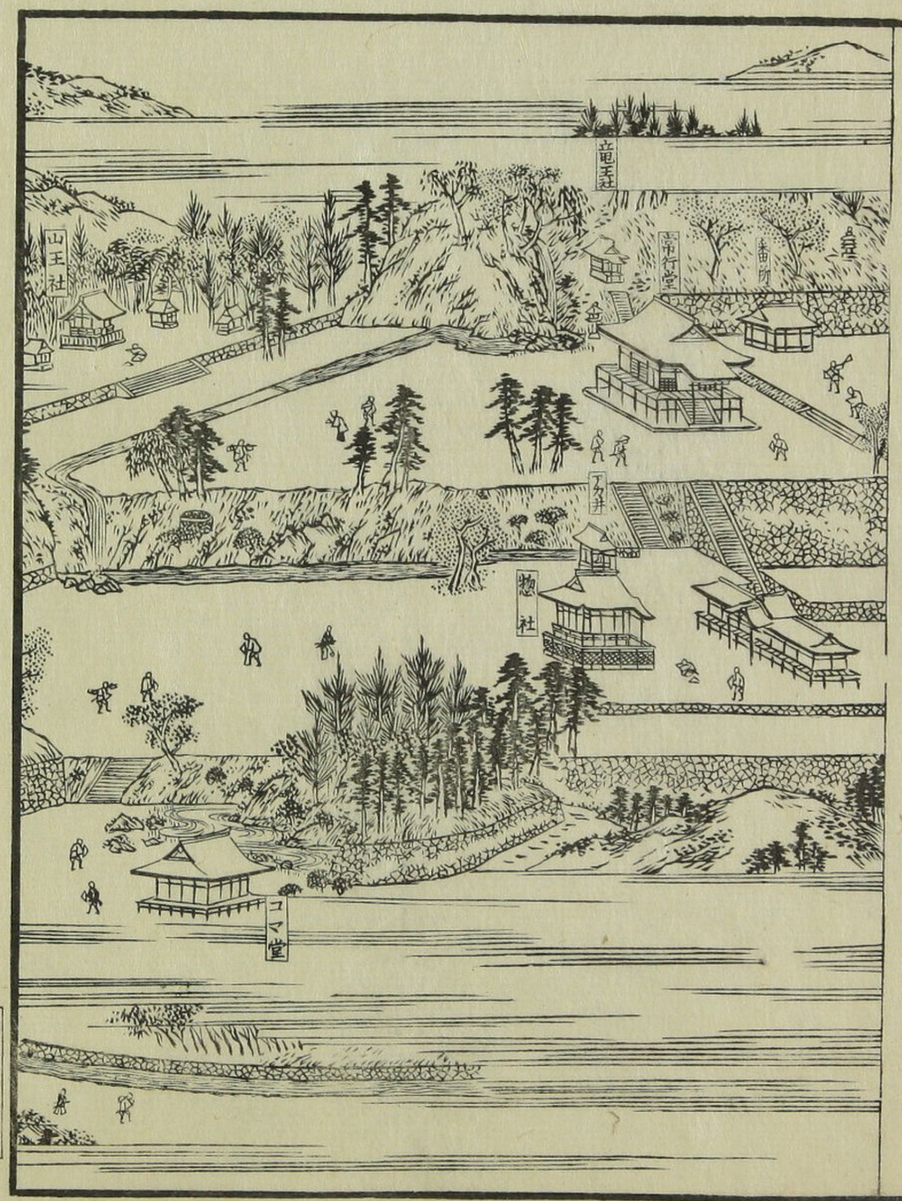

談山
本社
楼門
宝庫
十三層塔
講堂
供所
二鳥居


多武峯本社
宝庫
灌頂堂
本願堂
鐘楼
鶴蔵

其二

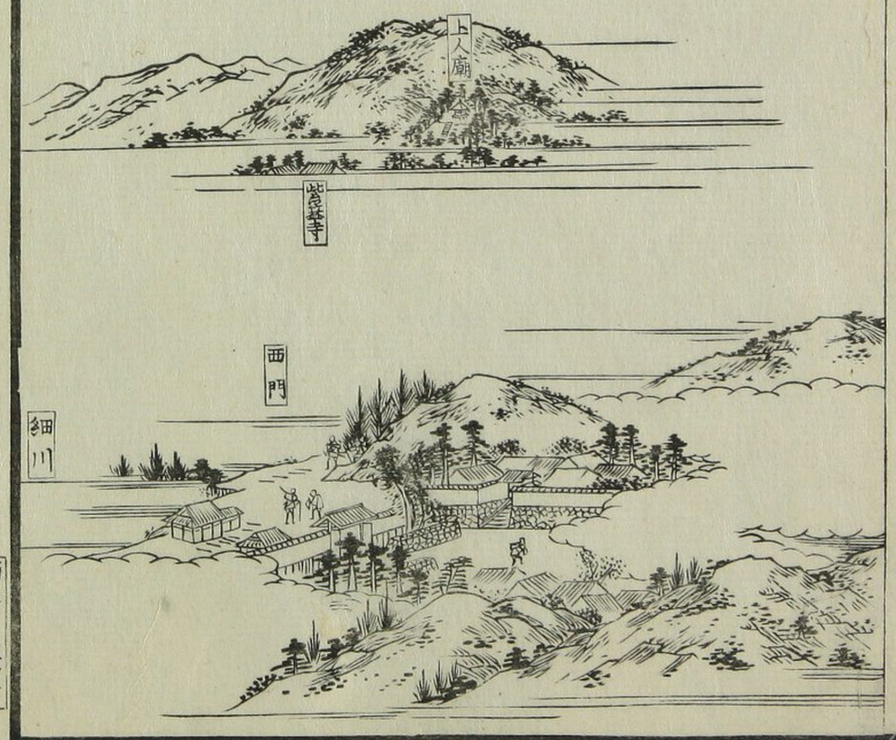


薮八地さとさく
春
多武峰
花屋斧鵞左



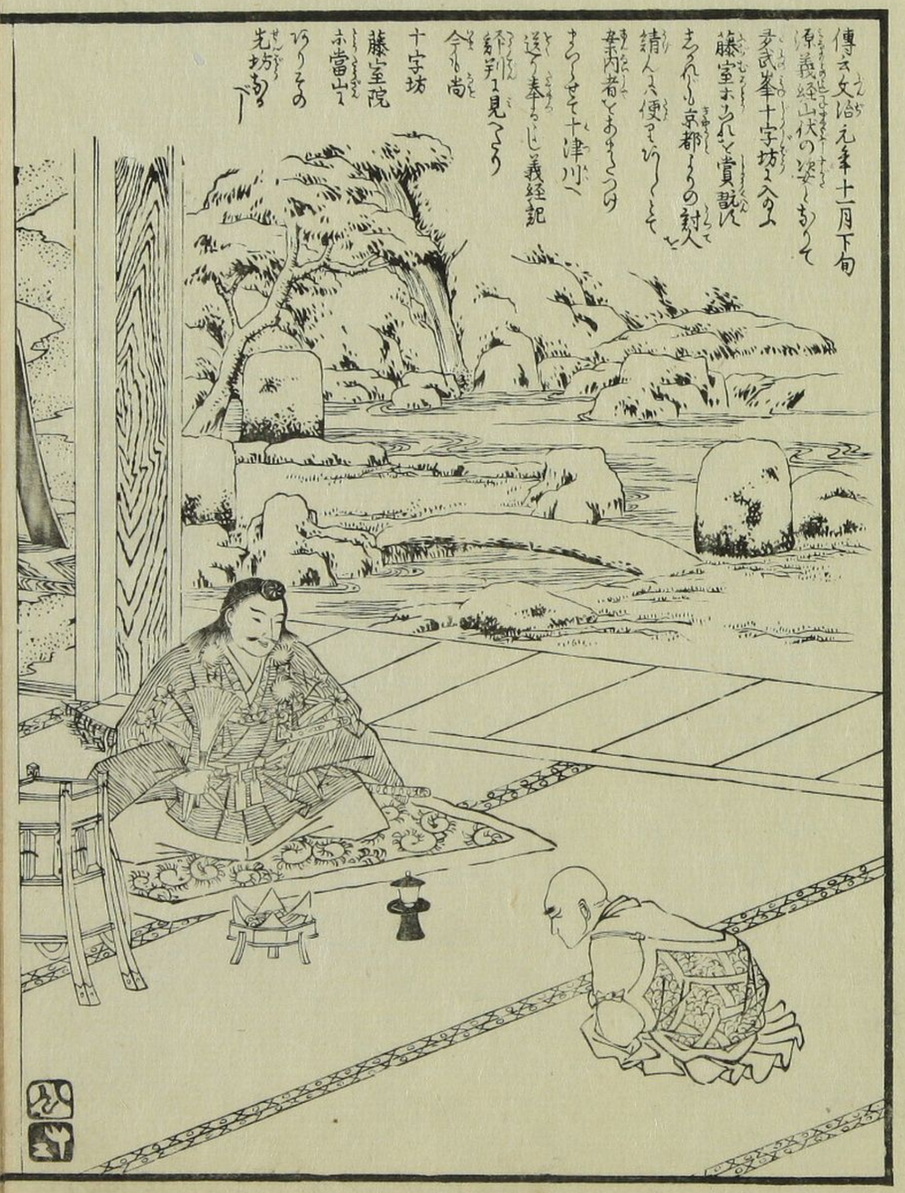
西門

女人堂西門の傍より坂路とのぼりて本社に對せ山上よりくるふ拜に當山より長谷寺にくるに東の口に出て倉橋に下りさらに井より追分に行て圓寺に下るに西の惣門より細川に下り上居嶌の庄と經て圓寺に出る行程凡五十町街道の左右に名所多し



殘し白鳳七年九月日本に着岸ありて御弟不比等に對面ありしに文大織冠ハ和尚在唐の間本覺ぜられぬ然ると摂津國阿威山に葬り奉り由と語りのひに和尚の曰我ひそかに亡父の祠を聞に和州淡峯ハ靈勝の區にして唐土の五臺山に等し我と一彼地に墓を築おかば子孫の後孫繁昌すべし也又唐土に有し夢不我身ハ淡峯に居しに大織冠まさしくせめひて吾今天上不生と受しに汝此地に於て堂塔を營み佛乘を修行せば余有が吾も又此に降りて子孫を擁護すべし言つけられしかそ正しく己巳の歳十月十六夜二更の時に有しぞと申されをば亟相不比等聞て先君の薨ぜられしも某年の某月日ありし夢の正しに感涙を催しのち定惠ハ阿威山に至りて遺骸を取て淡峯に改め葬り其上に十三層の塔を構へられる然るに此塔の一層ハ唐土に留め遺され程に只十二層と營建らを造作の法式全且ざる事し歎れしに少雷鳴甚しく雨風おこりて山を動ずるが如くなりし黎明に天晴れ靜まりるに不思議なる哉唐土に遺せし塔の材木のごとく此に來りて郢も損じる事なし定惠不比等と共に此民も感嘆せしら事なり斯て不比等文殊師利菩薩の像を彫刻し

塔中に安置しめひらる斯て後定惠和尚又二丈の殿舍を建らるゝ也
又其後真昇大法師長者負信公に依て奉てゝ御營造りなし要紀見てゝ
備又大織冠の尊像八近江國高男丸が造る所なり然るに又撿校千滿法師更り
新像と作て古像と躰中に收め奉てて安置はゝ聞も
又定惠和尚建營の金堂實性法師の如法堂村上天皇の勅願ゝゝ法華三昧堂
摂政右大臣伊尹公の曼陀羅堂田融院の勅願の普門堂座主真昇の食堂等八
星霜と歴て其名のみ殘て當時八廢せり
大織冠の尊像八將に天下小凶衰りゝんとする時破裂しめ事りゝ先永義元
年正月廿四日右方の御面貌四寸余破きめひゝゝり以来文治三年まで十三度
あり其後と知られ破裂の度毎に奏聞と歴めきば勅使登山りゝく宣命成
ゝみ給ふに必ずじりゝの如く愈させゝゝ畧紀見てゝ
再興年歴
人皇七十二代 白河院 永保元辛酉年三月五日四禄ゝゝゝ其後再興あり
又 七十四代 鳥羽院 天仁元戊子年九月十一日火止ゝゝて其後再興
又 八十代 高倉院 兼安二癸巳年六月廿五日焼亡ゝゝて同治承元丁酉年
十二月二日并始りて十三重塔建營八 頼朝大和國廣瀬の住人右馬允康教也ト云



其後寛文七丁未年　公務の少暇にして御造営ありて
郡山雑紀に云多武峯大織冠の社戊郡山へ遷し天正の末より其所と今も大織冠ゝらゝ
又城内に大織冠松ゝらゝ樹あり増田右衛門尉郡山在城の時此の社を又多武峯にうつし
是慶長のイヽめ也

什寶大畧

大織冠尊像　光明皇后真蹟勸普賢経

粟原寺露盤　和銅八年　増賀聖人之像　一軀　小揩法華経　一部　無名氏

二帯笙　信貴山行圓作　古縁紀　四巻　繪藤原光信　同一條禪閤　外題　近衛基照公

新縁起　二巻　後水尾院勅　繪　住吉如慶　具慶　詞　堂上集書

大織冠像　小野皇筆　般若院蔵　黄大癡天池赤壁圖　正行院蔵

虎　無名氏　圓城院蔵　山水　居経子筆　山水　無名氏　観行院蔵

巫渓雲濤圖　陳化龍筆　賢聖院蔵　馬　子昂　徐有貞揩書　慈尊院蔵

天馬賦　王世貞跋　京太郎物語　一巻　為和郷

此余霊佛霊宝牧峯すべて茲に畧に

大織冠神像破裂記曰

古来天下将に事變有んとすれば神像乃ち破裂し光輝天に徧く山上大小鳴動して蓋破裂せるは事有ると必ず鳴動する事にして又偶鳴動して破裂せざる事にして神威の發顯する其軽重大小固測るべからざるなり而して其鳴動する必ず栗原より起り漸く山上に迫ぶ相傳ふ山東より鳴動するは谷ゆ國王あり南なるは谷め大官あり北なるは谷め氏人あり西なるは谷め萬民あり中央なるは谷め本山なりと云苟くも破裂の變ある小値ば則山徒等破痕裂様の大小を拜瞻し狀を具して京に聞し朝廷相議して戒め慎ん恐れ懼る大官直伐傳へ占官筮して上りる時日を刻定し使臣を發遣し奉幣誠を歸し告文感を敷に裂像乃舊に復し災禍も亦銷する事を得る云

○醍醐天皇御宇昌泰元年戊午二月七日戌刻神像破裂に

○一條院御宇永祚元年己丑六月六日破裂に

○後冷泉院御宇永兼元年丙戌正月二十四日破裂に
○白河院御宇永保元年辛酉三月六日破裂に
○近衛院御宇久安四年戊辰十二月八日破裂に
○後白河院御宇保元二年丁丑七月一日破裂に
○二條院御宇應保二年壬午二月二十三日破裂に
○六條院御宇仁安二年丁亥五月二十三日破裂に
○高倉院御宇嘉應二年庚寅閏四月十三日破裂に
○兼安二年壬辰六月九日破裂に○四年甲午十二月四日破裂に
○治承二年戊戌三月十九日破裂に○四年庚子七月二十二日破裂に
○安德天皇御宇養和元年辛丑月日未審
○後鳥羽院御宇元暦元年甲辰七月二日破裂に
○文治三年丁未十一月二日破裂に
○土御門院御宇兼元二年戊辰四月十四日破裂に

○後醍醐天皇御宇元亨二年壬戌二月十九日破裂に
○後花園院御宇嘉吉元年辛酉二月廿六日破裂に
○長禄三年己卯月日未審破裂に○寛正六年乙酉九月十三日破裂に
○後土御門院御宇文明七年己未二月十四日破裂に
○十八年丙午十一月九日破裂に○明應五年丙辰十月十三日破裂に
○六年丁巳三月或云四月二十日破裂に○七年戊午正月一日破裂に
○後柏原院御宇永正三年丙寅九月四日○七年庚午三月四日破裂に
○十一月二十五日寅刻破裂に○八年辛未三月二十九日破裂に
○後奈良院御宇天文元年壬辰十一月日時未審破裂に
○二年癸巳三月十七日破裂に○三年甲午八月十一日破裂に
○十一年壬寅九月二十五日破裂に
○後陽成院御宇慶長十二年丁未閏四月二日破裂に額一寸廣一分横二寸余廣一分朐七寸廣一分 巳の刻前
神廟後峰大き鳴動〳〵光りり群國小散飛す萬民怪異に七月二十一日

寺主順藝上洛〳〵く狀を奏す八月二十七日関白。正五位上行天文博士兼
左馬助久脩を〳〵く筮せ〳〵む明年戊申正月二日高嶽の松樹周圍一丈三尺余
根より梢に至り〳〵く悉く裂く狀絡絲の〴〵〳〵其裂る根より半に至つて二丈余廣五六寸許ありて小
く小是〳〵より遠近傳聞〳〵諸人拜禱すること日に衆〳〵三月十三
日告文使清閑寺右中辨藤原共房登山に同夜交の刻祝文を奉る事九
七〳〵〳〵く平愈ひる事〳〵十四日帰洛に六月十二日順藝再び上洛
〳〵く告文使を請ふ九月廿三日告文使吉田左兵衛佐卜部兼治山ふのぼり
廿四日酉刻入く祝文を奉て神道秘法を修す乃平愈ぬ得〳〵て古来たぐ
此時の破裂最奇異と云く
昌泰元年より慶長十二年に至り〳〵く七百有十年其間破裂すること事九そ
三十五度告文使の登山をふ者凡そ三十三度慶長より以来聞こ鳴動すふ
事ひのごとしといへども復破裂する事有ることなし〳〵天下泰平四海無支の長久ふ
る是に於く乎仰載すべき也云く

大化元年夏六月中臣鎌足連與中大兄皇子相計誅入鹿臣

本朝通紀

人皇第二十六代　皇極天皇の御時蘇我蝦夷大臣病おこりて朝せざる是こゝろつて私に紫の冠と其子入鹿に授け大臣の位に擬し又其弟を呼で物部大臣と曰兄弟肆に朝廷を輕んじ終に山背王を殺し倍驕意增長して稍て天子の御位をも奪ふの情あり故に家を甘樹岡に雙べ起て父蝦夷が家を宮門と称し己が家を谷の宮門と称し己が男子女子を王子と称し萬禮諸式おのゝ天子に準擬し加稱家の外面に築土を搆へ門の傍に兵庫を設るつゝ力士をして兵具を持せ守護しむ又父蝦夷も畝火山の東に家を造り池を穿て城廓を搆へ弓箭を備へ兵士を置て殆反逆のさまを見るに斯て鎌足連天下の急危を察し中大兄皇子をすゝめ蘇我倉山田麿を密事を終に子麿大臣に命じ入鹿を誅するの謀をなす時に當つて三韓より表を上る是を僥倖として大極殿に天皇出御まします三韓の上表を聞し召に倉山田麻呂此表文を讀む則ち入鹿座に侍る大兄王子かゝて期したまひ門を閉るの府命じて十二の門をさし鎖めさせて人の往来を絶ち自ら長き槍を執て殿の側に隱る鎌足連八弓矢を持て助けとなつてこれを衛る既に時刻に成も佐伯連子麻呂等入鹿が威に畏きて前に議しこゝろ手苦とまれども進て得ず大兄王子これを見て咄嗟と一聲うけの子と相図に不意に入鹿が頭にうち肩さゝけて斬つるをば入鹿驚起て立こゝろと子麻呂かゝつてつゞけて揮て脚を斬る終に子麻呂大臣連おそれ入鹿に止めを刺し早んぬ是こゝろつて父蝦夷ゆゝしび徒黨の者ども殘てもく亡びうせ朝廷を安んじ奉る事皆鎌足連の忠功に賴ところひろく実に古今無双の良臣天下の柱礎たるべし

大織冠鎌足公像

般若院所藏
小野篁筆

曉鐘成縮圖

紅葉洞

本社の下の方をいへ紅葉の樹ゆゑ
あるて秋の頃ハ錦ともせり
玉葉集
もゝ衣かさゞ山にをる色てゝ
此哥ハ粉川の観音素意法師につけゆひるとも玉葉集に見えたり素意法師ハ當山の住僧に
して和哥を善くすると云

荒神山

本社の向ふに有荒神祠法華経の塔あり

開基定慧墳

當山にいの碑曰入唐求法沙門定慧和銅七年六月廿五日春秋七十
端座遷化云云

元亨釈書云　釈定慧ハ大織冠の長子なり其前三十七代孝徳帝に妃あり
しゞ懐孕るとしより既に六月を経たりしに其頃大織冠の寵遇厚かりし故に此
妃を賜ふて夫人にもせり偖契約して曰くハ其生まゝん兒をも男なりせば
取て卿が子とすべし又女なりんにハ朕が子とすべし有て所に此定恵殊数年
得たり故に名づけて鎌足の子と定まれり終に沙門恵隠のもとに投じて出家
せしめ偖白雉四年にいたりて遣唐使に随ひ海に浮びて則ち長安城に到る其時
唐の第三代高宗の永徽四年なりしかるに程ふして慧日寺の神泰と師として習学
せしに事殆十歳の間なり調露元年百濟の使に伴ひて帰来せり此芳は白鳳

七年九月にそ有〜〜〜和銅七年六月廿五日化寂せ〜〜ふ臘八十五ト云

淡海公墓

灵武峯の南百歩計に有十三重の石の塔と建
延喜諸陵式曰　多武峯墓　贈太政大臣正一位　淡海公藤原朝臣
在大和國十市郡兆城東西十二町南北十二町〜〜
本朝通紀曰
養老四年秋八月右大臣正二位不比等薨
不比等ハ大織冠鎌足之第二子也性禄恭〜〜私なく学識ありて律令に通ト忠義
を以て朝に事へ帝をゐたゝ是を寵〜政事をとりつくゝまた妻ハ淡海國に封ト斉太
公の故事に比〜〜淡海公と號ハ今歳病で薨ぬ時に年六十二帝ふゝ悼惜一
ひとしを為に朝と廢〜哀を内寝に挙げ給ふ
太政大臣正一位を贈〜れ文忠公と謚ハ〜〜

如覺禅師墳

多武峯より東五町余飯盛塚村にあり　一説に灵武峯少将入道と号ス云云
俗に飯盛塚〜〜
此禅師の父ハ九條右大臣藤原師輔公母ハ延喜帝の皇女前斎宮雅子内親王
也童名まもちと君〜〜で聞〜〜生長のしてハ高光少将〜もん言りつゝ心ある人
にて雅ふ逢奉ふ〜〜ふる時ゝや車ふ下て懐帝と高く畏みもりて勿に臣て
取のひるゝ〜〜で又月の隈もり〜澄のぐりて愛ふれと見のひく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

紫蓋寺

[illegible]武峯[illegible]乾五丁余[illegible]西の惣門[illegible]細川に下る道[illegible]右の方へ入る[illegible]

[illegible]

栄花物語大鏡
續世継[illegible]

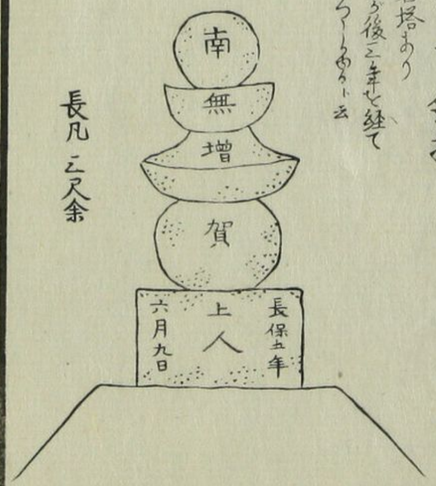
本尊　釈迦牟尼佛　常行念佛堂也　鐘撞

当寺の山上[illegible]小堂の内[illegible]五輪の石塔あり
[illegible]武峯の講堂の下に納やしと[illegible]後三年七経て
[illegible]云

本堂の前左の方[illegible]

増賀上人墳

撰集抄曰
むし増賀聖人[illegible]
紛[illegible]通心[illegible]天台山の根本
中堂[illegible]夜[illegible]祈[illegible]
[illegible]実の[illegible]出[illegible]侍[illegible]事
終[illegible]武峯[illegible]所に[illegible]庵入て
智朗禅師の庵の形[illegible]残[illegible]
居[illegible]



長凡　三尺余

砥動止観法慈
恵道摩法流夢語
利名[illegible]文[illegible]猫狸
殺載刀[illegible]事

法隆寺善住院所蔵

増賀上人参内像一陽斎永納図
法隆寺善住院所蔵

暁鐘成縮図

釋增賀ハ平安城の人〻〻参議大夫橘恒平の子なり十歳の時より叡山乃慈
惠僧正に屬ひ顕密の二教に渉り止觀の奥義究む事来聰穎〻〻器量
いと〻〻殊〻ハ名利と悪き人の交りとも絶離をてぞ居られ事る或時ハ乞
丐人に立ゝ〻まじて爭ひ喰ひ又ハ狂氣の者の躰まりて臣又師範なる慈惠僧正
小任ぜらるゝ系内の前駈に立て〻〻干鮭或帯して太刀のごとく臣痩牛に
乗て緒門弟に立交て余の〻もゝ〻〻太皇太后の戒受ひ〻〻んとあれば宮中に
登りて麁語と言出し〻〻退出し又佛の閑眼に招けハ行て口論して安〻〻と
〻〻空〻〻敢られ事ハ其後勢州〻〻下向の道をゝ〻〻九禄にありて叡山に帰り
夫〻〻尋武峰に籠りて在せり

長保五年六月八日ニ

みつ〻〻と八十餘りて老乃波涛月に骨をうしゆるるか
と詠じて九日ニ金剛印をむすび安禪〻〻〻終りを取り上（辛酉八十七）遺言に〻〻〻
三年沈経て廟と啓〻ふ全身壞ぎ儀相生るごとし〻〻

氣都和既神社　上村茂古の杜おわう傍に瀑布あり高サ凡二丈許　今八幡宮と称ス

細川山　細川村に有　萬葉に出　氷室古址　細川上居　尾曽村の生土神なり　此地八多武峯より岡の町に下る道なり　同村山中より今明神に移して樹木のまろに有られ其址あり　御陵山　細川村の山谷にあり

細川瀬　右に同ト　南淵の細川山ぞ冬もまろに紅葉今さかりかも　太安万侯

萬葉　抹手折多武山霧茂鴨細川瀬波驟祁留　献舎人皇子歌　○舎人皇子ハ天武天皇の皇子也　○此多武山ハ則多武峯の事

藤花山懿德院　尾曽村にあり細川の街道より左ニ入山中ニあり

本尊　毘沙門天王　聖徳太子三十四代推古天皇の御宇當村の巽の方の峯に天降りたまふ　尊天にて沙門常空感得し庵室に安置し信じ奉る所なり　遠近の貴賤年日々に傍らに詣る　今尚霊験あらたなり

淨御原　上居村にあり　天武天皇元年飛鳥淨御原宮と号して即位まします　又遷都ありて群臣に信濃國の図を奉る　終に朱雀元年九月淨御原宮　崩じ給ふ　又當村に淨御寺あり　慶寺あり　寺中に石の大塔二基あり一基ハ高サ二丈許　又一基ハ二丈許　土人曰聖徳太子の建立なりと寺紀未詳　又一説に上宮寺の址なりと云　然るに宮村にも秋　島荘村の道の傍田圃の中にあり則ち岡に下る道の左に見ゆる也　高サ凡二間許　周リ凡七間許　大石を以て積み築き奉る古址なり

石無臺

日本紀　天武天皇元年九月庚子　結二于倭京一而御二嶋宮一癸卯自

島宮　移二岡本宮一是歳營二宮室一於岡本宮南一即冬遷以居焉是謂飛

島淨御原宮　二年春正月丁巳朔癸未天皇命有司設壇場

即帝位於飛島淨御原宮　朱鳥元年秋九月天皇病遂不豫

崩于正宮　戊申始發哭則起殯宮於南庭　辛酉殯于南庭

按ニ當島荘ハ往古島宮の旧地なりと云ふ　既に上居村ハ淨御原の古址なるを此地凡そ南ハ岡なり右に殯宮なるべし　古蹟なるべし

勾池　右同村に有　萬葉集出　真名池　勅撰名所に高市郡に　勾池と同所なる

天武紀十年秋九月周芳國貢赤亀乃放嶋宮池　島宮　同村なり　島の宮真名池なる故

萬葉　島の宮真名の池なる故　又島の撰原なり

全　島の宮池ゆ放ちし亀の甲に乗りて蓬来の山を見つるかも

南淵先生之墓　南淵村にあり此地八岡の町なり凡十八町許　已の方にあり樹林の中に石碑あり　今明神塚と号ひ又稲淵明神と崇む　例年十二月十六日祭祀あり　墓の傍に一畝余の田あり　年々在中より耕作し以て祭料に充る例なり　當村ハ則ち先生の居所なり

先生ハ南淵漢人清安なり　推古天皇十二年勅を奉つて高向漢人玄理等と共に入唐し周孔の教を学び熟得して後本朝に帰る則ち時の博士なり

天武帝殯古趾

傳云高堀と為の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

皇極女帝二年中臣鎌足中大兄皇子と
相議して逆臣入鹿と滅その時密事と
人の疑ふんことを慮て大兄皇子も
鎌足も俱に手に書を把て南淵先生の
所に周公孔子の教を学び其往還の
路上肩とゝぐて偖に大事を図ることを

王代一覽小高漢人玄理ハ
三十余年伐経て皈朝せり有
ものれば南淵漢人も此時ひ〳〵
皈朝せ〳〵ものゝ〳〵ん欤終焉の年歴詳ならず

日本紀曰　恐他嫌頻接而俱手把黄卷自學周孔之教於南淵先生所
遂於路上往還之間並肩潛圖云〻

天德山龍福寺

稲淵村にあり和合院と号ス本尊大日如来と安ス古刹の旧趾なり今僅小草堂
一宇僧坊一舍存ス今ハ浄土宗にして持佛ハ弥陀二大士を安ス
大日堂の傍に竹野王の石塔婆あり文字剥滅して分明ならず下の段四方に文字のごとく有
僅に所見左のごとく

惣高四尺八寸余
横巾凡壹尺八寸

前面昔阿弥陀　以下八字七行漫滅
次横　辺　峯北　以下同上
後　道幽　以下同上
終横
天平勝寶三年□□
辛卯四月廿四日□
従二位竹野王　高凡六尺七寸許

右稲淵村八岡の町より未の方半里許にあり

飛鳥川上坐宇須多岐比賣命神社

右同村に鎮座今宇佐宮と称ス
三ヶ村の主土神なり神名帳に出

南淵山

細川山のあなびの上の山なり八雲御抄曰ものゝ細川山のもみちも紅葉
哥枕に稲淵山とよめるも此地なり又南淵の細川山の紅葉
萬葉
同　御食向南淵山の巖者落波太列可消遺有　柿本人麻呂
真十鏡見名淵山者今日鴨白露置而黄葉将散

男淵　女淵

稲淵の上畑村に　皇極天皇元年八月南淵の河上に行幸ましく
四方を跪拜天を仰ひて雨を祈りのまに雷雲に鳴ひて雨地に波を湛て五日晴間
もなく天下大に困ひ百性萬歳を稱ん　日本紀　是則元朝四方拜の基なり侍るなん　記家次第

金剛寺舊趾 坂田村にあり今はづれに僧舍一宇存ず本尊藥師如來 脇士日光月光十二神列ず寺僧云本尊の背に大なる燒痕あり是則守屋燒却の時の痕なりと

推古天皇十四年金剛寺を造る是今謂南湖の坂田の尼寺なり日本紀に見えたり

皇太子產湯の水の古跡盥塚胞衣塚ホ皆當寺の傍辺にあり當村八岡の町より凡七丁ばかり

胞衣墳 同村田圃の中にあり此塚ハ坂内村の中にありて祝戸村の領なり聖德太子の胞衣を埋む所なり毎年胞衣塚年貢として今ハ其會釈なり

產湯井 同村往來の傍にあり今埋りまして幽にのこる井の内千歲井とあるハ是なりとぞ此古跡乃ちかたらに十間ばかり上の方田圃の中に石の佛像あり土人の云聖德太子の像なり則ち千歲井のまへに建る所なりと云

盥墳 同村にあり是ハ今田圃となりて田植の時赤飯を供ず此石を祭るとぞ

都墳 右同村にあり周凡一町ばかりなれども故宮の旧趾なるゆへ尚考べし

按ずるに都の名ハ故宮の旧趾なるゆへ尚考べし

加夜奈留美命神社 栢の森村にあり今高神と稱ず

神名帳に代実錄出

大仁保祠 谷村にあり今春日社と稱ず 三代實錄に出

陽石 祝戸村の道の傍にあり其形恰も陽根に似たるを以て号く大石と

右入谷栢森塔 稲渕祝戸赤吉野上市 にして千股にあり芋ヶ峠を越て岡寺に下る道すがら

第七番 東光山龍蓋寺真珠院 一名 岡寺 真言宗 本堂南面

本尊 如意輪觀世音 長丈六の座像二臂也之國の土を以て作る所也

開山堂 義淵僧正像 左役行者。長三体 右弘法大師 凡等身也 **大聖觀喜天** 本堂開山堂の間に安置候

世三所 觀音堂 開山堂の向ひにあり 順禮札納所 觀音堂の右の傍有 **辨財天祠** 札納所の右にあり

抑當寺は人皇二十五代　舒明天皇の皇居岡本宮の旧地にして其ゝは岡本寺と
いひぐさと号して岡寺と言ふ〳〵は世に開基は義淵僧正にして三十九代　天智天皇北
御頭あり釈書に曰釈義淵は世姓は阿氏にして大和國高市郡の人なり然るにその
又京来一子のおれ事と憂ひて観世音に祈りにて一夕ふ及びて庭の辺にふ小児の
啼聲の聞てゝ出て見るに紫縮の上に一の包めるのあり其匂い香しく
傍辺に薫じ来るふやぐてその包をひらくと開て見るに則ち内に小児あり父母の
喜び限りなく是則ち観世音の給ふ子なりと思ひて取上て養ふ程に数日を経へ
ばして成長せり其時は天智天皇の御宇にて此事天聞に達し小児を大内に召
上らき皇子と同じく岡本宮にて養育しめり後に出家して智鳳法師に従ひ
唯識を學び又入唐して智周法師にしたがひて普く法相宗の奥義を極む智周と
いへは恵恩窺基大師の孫弟なり故に帰朝して後法相宗を盛んに弘む行基道慈
玄昉良辨宣教隆尊ふらの義淵の弟子にして教を受くされば義淵は化道寺
に安置にしたがひて建立造営の事なれば故に龍蓋寺當山とそ

龍門寺竜福寺を共に創建あり大寶元年に僧正に任ぜ神亀五年十月に
入寂せるに則ち喪葬の儀式もて勅紹ありて悉く帝にに営むにあり也

續日本紀曰　文武天皇大寶元年三月乙酉以義淵法師為僧正云々

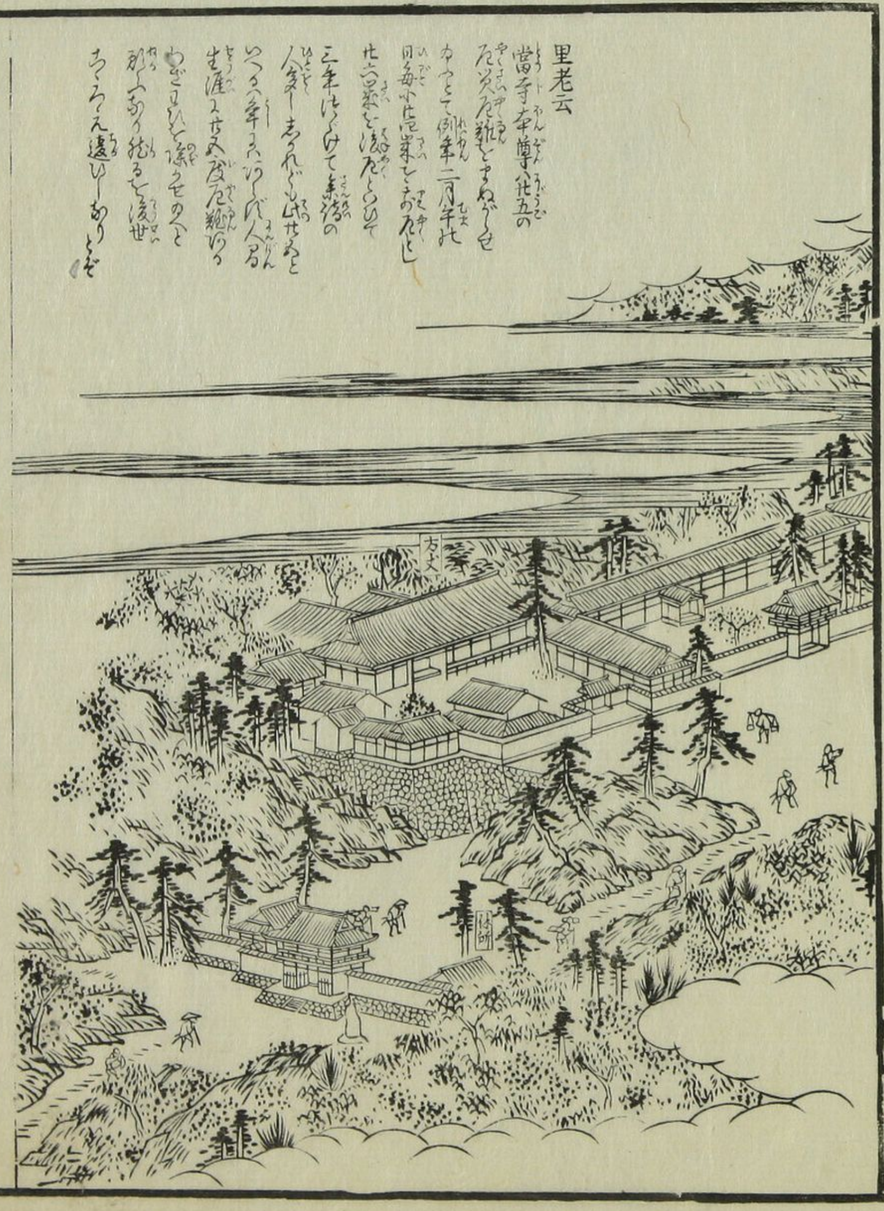
本尊如意輪観世音の其初は弓削道鏡此寺居住の時節禱首王勤（誓首君）災
難の事にして逃のびて龍蓋寺に入杉の林に隠る道鏡が曰是誓首君が厄災にかゝ
の卦あり早く如意輪を作るべしと命じ則ち一尺二寸六臂の小像を作りて終に其
難を免れ道鏡此尊像を乞得て孝謙帝に奉りて後伽藍を造立し彼尊
像を安置し奉り如月初午日天皇行幸ありて落慶の式ありて斯く中興弘法大
師の二國の土を切りて丈六二臂の像を作り彼小佛と佛胸に収めて又拾芥
抄曰丈六の土佛も弓削道鏡の造立にして其後火上りしにより又厄難を除
のゝ水鏡に見せり又奥院の霊水は弘法大師龍神を祈りめひしに則ち清
泉洋々として溢満せり諸人ともに飲み厄疾を除くと言つたへり例年二月初午
の日ちなび二午三午ホの日遠近より群集に則ち厄除の祈願の人多し

第七番

岡寺

奥の院まで

うろこ
ハ
岩も踏まえ
苔の若
花屋
鳥左



里老云

當寺本尊仏五の
石ゾウ石仏とまぬがせ
かつて例年二月半ば
月毎小仏堂とあれし
北山巻と法花しらべ
三年ばくけて未法の
人第一あるれども出世あと
いくさ年えいつ代人名
生涯えせ武尼絶のる
わざるとと孫をのと
別しあり拝るも後世
ろろえ遠ひ一ありこそ

瑠璃井 本堂より凡二丁斗奥に有霊水也傍に梵字の石 弘法大師石像佛足石などあり 八大龍王祠 霊水の上に有 弥勒窟 龍王祠の左の傍にあり

往昔弘法大師入唐し給ふとき渤海に浮び海上荒くし濤船を打ち帆柱終に頽れ檣くだけ大宛國恵州府の間にて空海弘法大師もすでに危うきに及べり其とき空海心中に如意輪の呪を誦し給ふに忽ち雲中に如意輪の尊像現れ給ふ斯有し程に風穏やかに濤静まり船衡州の界に着きぬ其時しも浮びたる許多の諸船は皆海底の藻屑となりぬ空海は安穏に入唐ありて密法修学の後帰朝し稍て如意輪の像を造り給ふ今の当寺の尊像是なりと 久米寺の縁起および霊験記真鈔などにも此趣を写せり是によりて世人此尊像は風波の難をよくまもらせたまふと言傳へけるとぞ観世音を信ずる輩は水難のがるゝことは観音経に見へたり

普門品 若為大水所漂称其名号即得浅処云々

龍蓋寺額 空海筆 厄牒 孝謙帝聖作 同勅作印

八大龍王像 八枚 越智民部少輔宗栄寄附 尚霊寶許多あり略之

閻浮檀金観音 一軀 入覚法皇御手判石 尚此余略之

詠哥

今朝みれば露岡寺乃庭の苔さながら瑠璃の光なりけん

今朝見ればとは露と言んがために置たる初五文字なり露は天象の内にて置と云り雨霰雪の類ひを降といひ霞は引といひ霧は立といふ 撰行上人の哥にも

人の身も露の命とおもひ出ば涙は袖ぞ見えけるも

露とおもひて消ゆる身のくやしけれんもみえぬ斗ぞ

夜もすがら扇と秋の露はつゆけきに見とりそうんぞ

置とも言ひけるなりかゝ五音の相通なれば也庭の苔に露の置たる有さまされば瑠璃の光とも見ゆる詠なり惣じて露のものに置るなりて松葉にもをそく荷葉に丸くもの生ず形勢なく其置物によりて色もかはる其心を詠る哥に

白露の色の姿ははなれ萩すけハくれなゐの玉

瑠璃の光とは是又極楽浄土の体を詠るなり七寶の池には瑠璃の玉としく其上に七寶蓮華の花さきたる微妙不可思議の浄土の光景が取も直さず此岡寺の庭の苔

さるゆへ極楽瑠璃地上の荘厳ぞと見えたる也前の壷坂の哥と心ハ相同じ
要解と云ハ佛種ハ縁に従がつて生ずるといふ意を詠じたる也先今朝ハ煩悩の雨也
されど真如の暁なり露ハ已まで心なり其心の置所に従つて變るなりされ
則ち紅葉に置バ紅ひの玉となり不浄の所におけバ不浄の玉となる然ハ自他ともに
かゝる露の置どころハ清きより清ゐ置べき事なを肝要なり
然ルに河内の国渋川郡に茨木何某といへる浪人あり困窮して朝夕の烟を立かね
わびしさのあまりに妻ハ泣かくまで其頃の妻も唐くの娘にて三十も過ぎ候が
糸なき旅かしくして夫に向ひて云やう是ハ云ひなれんかるむかしより名ある人も
其も時にあつてハ貧しくなる事武士の風なりされども此ごとくにてハむかしより乳き
浮世のならひと思ひ辻切強盗をもしくるへしも時のつゐると待まへて進めけり
夫もあれよむつかし悩むる所不埒なりので今宵より辻切をして時節を待べし
と云々としての和州より河内へかゝる往還に出て旅人を来まちし待
ところに年の頃廿歳斗りの女の歩みくる小袖を着し四十斗りの下女に風呂敷
づゝみを持せ開アげに歩みくるを彼浪人立ふさがりて衣装を脱てけれども
なくバ唯一打にもすべしと云に女ハあれを脱ぎつまでつまれくハ近辺の者なり

妨げせバ為よろしからずと云ふに是ハつらき女の哭叫と近く立よりて手ばかられハ十八歳人をと殺
とさるれ是非もなく切殺しぬ下女ハ流つゝみをお持てかけ出しけれど浪人ハ其の衣類を
剥とり我家に帰れバ妻ハつゝく小袖を見て今のくるつの小袖を見るにハ此の揺笄ハつゞ
ならしと向ふ夫答て実さるゝ事なり人来らバ悪からなんと夫まで語つてゐるつらき
そのへに妻ハこもづき抱らバおんとハ体をなまくさげなつ付てくれかくしんと出ゆくに夫ハ
跡に顔見つぎ相もおそろしき女のる小袖を見れバ年のかどを呼さぞおまうんと思ひしに
左ハなくしく揺かりぐ心に氣のつきたる男に縁ある縁の内かの流女と一不小縁ハ縁てて
我も殺されけんあまきを菩提の縁しせんと髪をきり菩提所へ行衣をとらひて
直に法師となりにおいまり年月を経て大和路に来り山中の人倫絶たる所にて
日余く晩けれバ焼たすらに見ゆる縁をたより近づき見きバ草庵ありて一人の沙門
話我ちかし念佛となへ居けるかぎりに旅僧立より一宿をこひへ主の僧あれと呼て
来りもあるじ夜も者なり不自由なれども一宿して深夜に時ゆるに旅僧を
起しまろびて此に宿りを求めし主の僧ハ我も念佛相回となへ語りて捐く
一首の哥を吟じ涙と流し西向を打れけるに
帰めしく又あつらしき月日乃刑ましき年乃あとなるべ
ト縁じ相旅僧に対ひ我ハ茨木河内の者ニ年以前今月今夜妻をと盗賊りて殺

義淵僧正岡本の山中に毒蛇を降伏ス

されバこの世を捨て此山中に修せらるゝ身のうへを聞けバ彼女も〳〵こゝに年
月をおくりにけし女の夫なる旅僧ハあらそひ流しぬやう備も不思議の還念か
抛僧をそのまゝ付の盗賊にて有けるとなりて一人一千貫物ありける今ハ半僧の思ひ出に
敬ひたらせ給ふべしと僧を捨り形勢にまの僧ハ大に嘆きて慈悲をしてあら
しが稍ありて云申しける宿業のあはれさる今ハ是へのものがたりを聞て之年の
恨もたちまち晴れけり後ハ向後因縁ありて一蓮の系を図りんと僧ハ法の道を
とりけり堅固の仕生を遂けるぞ是に白露乃己がおもむきの在所ありて是とも
あれバ佛ともなるもふかき心に遠くべからず　詠哥奥義鈔
霊験真鈔曰所詮此岡寺に参りて見れバ寺の風景露の草葉に置までも殊
勝なる粧ハさながら西方浄土のおもかげ思はれ又ハ南方観音の浄刹かと疑はる
ありし頼りの感を催され風勢ひとかたならず知べし又云信心徹倒して三昧を成就
ときまべ上代の韋提希夫人等のおもかげ坐あるべき極楽の荘厳を観見する
等又云螺髻梵王ハ娑婆世界を微妙清浄の土と見るが如く等　已上観経并智度論意之
今の哥乃さまぐ浄土をふかく意を合すべし
一書云人皇三十九代　天智天皇の御宇此岡の里の山に毒蛇すみて人民を悩ニ

ゐて甚し武士おも毒氣にいろうて退治する事能はず是よりて當時の高僧なる義淵僧正に勅いうて毒蛇を退治すべきと也義淵僧正奉つて彼所にいろう秘文と唱へ珠數とりつて大蛇の頭を打なでゝ大蛇たちまち身体を縮め動く事絶ぬ原来僧正大力なれば毒蛇の角を持て引出し其所ゟ池にうると僥倖に池中に大蛇を投ゐて五十六億七千萬歳まゝげさん會の曉まで出る事有べゝと石ゟ阿字の梵字を書て是を以て此池の蓋し毒蛇を封じこめ斯て後世寺を建立し龍を封じ蓋をしめ由縁によりて龍蓋寺と号けめしぞ

按ずに當寺八其始崗本宮の旧地にて岡本寺とのべたと畧して岡寺と称する由也

日本紀曰　息長足日廣額天皇明舒二年冬十月壬辰朔癸卯

天皇遷於飛鳥傍是謂岡本宮

同八年夏六月災岡本宮天皇遷居田中宮

同

天豊財重日足姫天皇齊明二年於飛鳥岡本更定宮地

天皇乃遷号曰後岡本宮

右紀明天皇くゝゐく宮造つゝのゝ天智天皇元年すて凡三十余年に及ぶ殊再回宮地と定めゝ清浄地なれば何ぞ毒蛇のくゝいなくらんハ三十余年以前宮造りの節退治いうくさふう然るゝ左ハいくく後世毒蛇の人民に害するゐと理ゝあゝに又龍に蓋すゝの字義ゝ據らば同時に建立ゐうゝ龍門寺龍福寺ゝハいるゝ毒蛇のいるれ有哉疑ゐうくハ後人の附會の說なべ世ゝハいるゝ例すくゝゐゝ然る後近来出版の觀音霊場記図會も證ゝ疑ゐうくに著すゝゐハ論ゝ無譬のゐるさゝ言ふべゝ

治田神社

岡村ゝいろう今八幡と祀れ延喜式神名帳に出　高市郡五十四座の内也

逝田丘

岡飛鳥二村の間ゝいろう

岡寺門前の傍ゐう一の鳥居岡寺の町往来の傍ゝいろう

萬葉

明日香河逝回丘之秋芽子者今日零雨落香過奈年

茅七番當岡寺ゝう八香長谷まゝてゝゐ小道道凡二里半余ゐう先岡の町ゝう安倍ゐいゐる事一里阿倍近辺ハゝゐく古昔の都の跡ゐるゐゐ名所四所ゝゝゐ追分ゝて凡二十丁追分ゝう長谷にいるゐゐゝ凡一里ゐう然れども當所のゐゝ難ゝ又順くに見物ゐくけゝ長谷に出ゐゐゐも其道蛛手にゐゝしゐく損益ゐゐたゝゝが上所逝岡の町に帶留ゝゝく遠近と見ゐゐゝ分ゝて順路ゐゐ行ゝゐゐゐ尤道の損益岡の絲宿ゝゝ岡きゐゐ勝手に任せ巡覧すべゝ

ゐゐゐ紀にのゝ

酒槽岩

岡村ゝいろう二丁ゐゐゐ北山の方ゐいろう傳ゐゐゝ飛鳥の神社に献る神酒をゐゐ撒ゝゝゐ則ち酒殿の古跡ゐゐゐゐゐ一丈余の大石ゐて上の石面に穂くゐの溝と彫刻し事實詳ゐゐゐ

板蓋宮古蹟

飛鳥岡二村の間ゝいろう齊明天皇即位ゐゐゐ皇后の跡ゐゐ

酒槽岩之圖

岡村の北二十余東の山の方藪林の中より
上平面にて長凡一丈五尺許
巾五尺余高ゆ凡四尺余

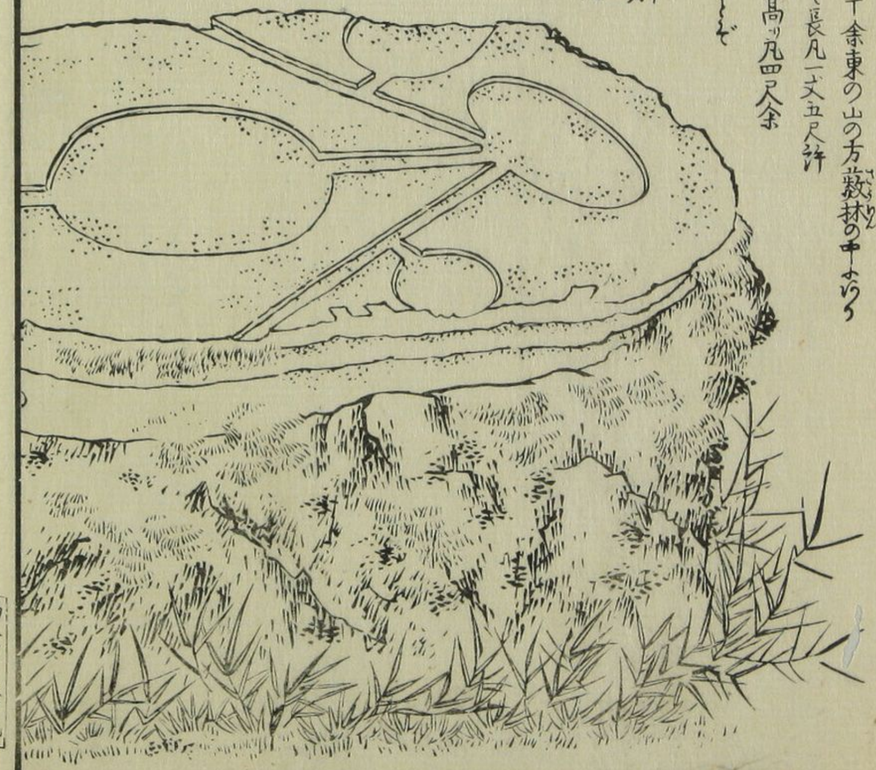
傳云飛鳥神社の酒殿の古跡なりしぞ
故に古へ神に奉る酒八醸して
醸し其瓶あぐべき奉るべぞ祭れ古八
今の如く槽にて絞りて造りしに非れ

酒槽の来由つ已

川原寺廢跡

橘寺の北二十許なり則
川原村し草堂一宇存れ
古佛の三天又十三天像なり
堂の辺に伽藍の古礎
なりしあり何れも瑪瑙石
なり今弘福寺と号れ

當寺八人皇卅八代
斉明天皇元年飛鳥の
川原宮に遷居しなり建立
有せられしぞ今後四十代



天武天皇十四年
秋九月天皇
御不豫ましまして
大官大寺川原寺
飛鳥寺本薬師寺
諸国に一百経を
分ち是に因て稲を三寺に賜ふ又
朱鳥元年夏四月新羅客に饗のために川原寺の伎楽を筑紫に運びしなり
しかるに皇后宮に稲五十束を施入あり同五年天皇御脳安らぎ給ひ
當寺に於て薬師経を講じ同六月燈供養を行はせ同九月親王以下卅人
集しく天皇の御病の誓願なりと日本紀に見えたり其後世々と経て五十二代
淳和天皇弘仁九年弘法大師高尾山に高野山にかつ勅の由聞えしぞ
大上天皇川原寺に大師に給ふ高野に都に通ひの道の宿にせしなり
この勅なりと水かゝみに著せり余有て寺の東南院に大師ありて住居せしぞ

其院ハ程なくまでも殘りのこり定惠和尚の住めし西南院ハ無なりしに林地に見てとり今ハたゞ名のみ殘りて幽なる草堂一宇ぞ古跡なる

川原宮古趾　川原村其趾なるべんゝ拔蓋の宮なり遷居しの又址なり

佛頭山上宮王院菩提寺　橘付なる俗に橘寺なり同寺なる八丁余西なり　此上人久我殿の息にて持明院殿の時代の人

本尊　聖德太子　法空上人作

脇檀　左　地藏菩薩　右　弘法大師

本堂内陣柱聯曰

日本佛法最初地　聖德太子誕生所　此堂ハ講堂なるべく往昔ハ丈六の釈迦三尊ぞ

安置せしを寺社記に見てとり又金堂ハ十一面觀世音弥勒菩薩の石像百濟国

なる渡りし四天王の像ハ今ぞ礎石の趾のみ存せり

太子勝曼經を編しのとき花天より降りしと傳ふ石壇におかる地なるべし其上に金堂を建

のとき花ぞ降りしと傳ふ吉野川の水石とかくの自

一字一石の法花經ぞあるべく其上ハ覆いなる

是日本石經のはじめなり

觀音堂　本堂の正面ハ　春日神社　本堂の左の傍　辯財天祠　池の中島より

弘法大師之碑　本堂の右の方山の半腹なり　緣記曰弘法大師一丈余の碑と云へり

其銘曰　佛頭山　上宮太子勝鬘講讃之砌　千佛湧出蓮華庭前之下

當山緣起曰

人皇三十四代　推古天皇十四年七月太子に勅して清涼殿に於て勝鬘經を

講ぜしめ給ふ太子塵尾を登てのぼり師子座に登てのぼり唯出家のおくりを侍り

ある諸の名僧大德其妙義を奉きゝ答ぜしめ給ふ最明なり講ぜるの

夜虛空に音樂きこえ異香四方に薫じ蓮花降しきり地に充滿し山頭に千佛

御面出現ありて光明赫奕たり天皇奇異のあまりに叡感かぎりなく則此所

に東西八町南北六町金堂講堂食堂五重塔經藏鐘樓中門惣門六十六軒の僧坊

甍を並べ我朝第一の伽藍ぞ建營しの太子四日本の靈鷲山ハ是なり此山を

一度ぞのぼる人運ぶ輩ハ極樂に往生せん是なりとぞ御哥二首あり

佛出むる庭ぞのうれしき玉ぞ押りてん

五濁を法乃まるぞ此地ぞ

生死之二海乎厭見潮干尺
山手之努比鶴鳴
世間之繁借廬爾住々而
將至国之多附不知聞

右歌二首河原寺之佛堂之
裡在倭琴面也云々
萬葉集ニ見エタリ

新古今集
菩提寺は講堂の橘
むしろひたる雪
世は中れ人

日本紀曰　豊御食炊屋姫天皇推古十四年秋七月天皇請二聖太子一令講勝鬘経三日統竟之云云

されば天皇叡感のひまより皇居浅ゆゑ寺塔建らるゝ所ゝ橘の都乃名ゝ所ゝ橘寺と称せゝぞ彼瑞花の降ゝ地八金堂と講堂の間ゝ玉林抄に見ゝ是ゝ今の太子堂の辺ゝ此地則ち清涼殿の旧趾ゝ千仏の御首出現ゝ所ゝ仏頭山と号せゝ且清涼山も称ゝ上宮院ゝ上宮太子の御建立ゝ所ゝ院号ゝ

畝割塚　太子堂の前ゝ太子七歳の御時百濟國ゝ諸職人を御招ゝ寺塔を建営有砂ゝ川の農具ゝ手ゝ本朝ゝ始ゝ畝割ゝ畑二段六十歩に割らせ給ふ其十分一ゝ三十六坪成石ゝ多ゝ積ゝ築ゝ其趾今ゝ畝割塚ゝ人是日本畝割ゝ始ゝ云

入勝鬘経講説の砌ゝ下ゝ花を此所ゝ蒔ゝ故ゝ蓮花塚ゝ也ゝ

古鐘　勅曰　建治四年泉州大鳥郡深井村善福寺鐘ト旧説ゝ見ゝれども今八亡ゝ

春井　當寺ゝ古昔ゝ之の井ゝ是太子御誕生の水ゝ東ゝ春井南ゝ十歳井此二の井八冷水ゝ西ゝ赤ゝの井ゝ是八湯ゝ出ゝ

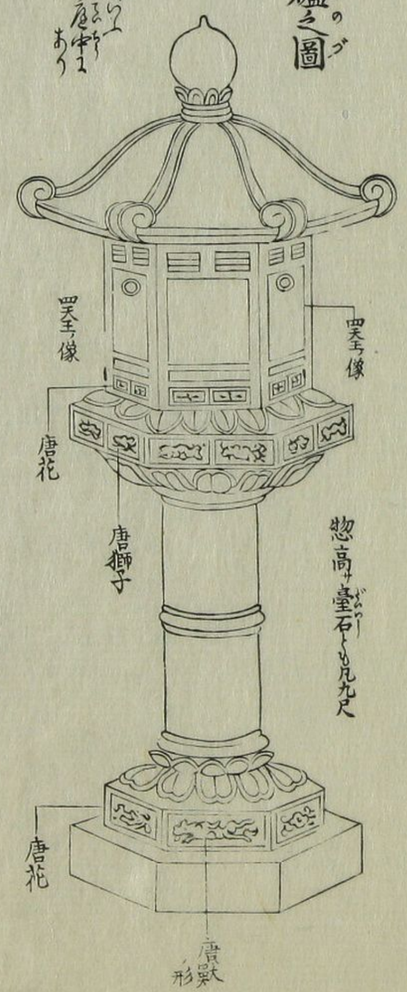
石燈爐　時代祥ゝ古代の相形ゝ世ゝ橘寺形ゝ称て賞翫せゝ僧坊の庭前ゝ今春井ゝ存ゝ

墨染櫻　石燈爐の傍ゝ有皇太子の御愛樹ト云

三光石　同庭中ゝ太子御誕生の砌影向ゝ瑪瑙石　同上

聖徳太子二歳尊像　僧坊ゝ安置八日域最初ゝ也　并ゝ役行者不動明王の両像を安ス

古作石燈爐之圖



右近橘古趾　僧坊の庭ゝ往昔宮中ゝ時のゝもゝぞ今尚形ゝ存ス

拾芥抄曰菩提寺又橘寺ゝ号ス志度道場上西海人ゝ寺ゝ建立ゝ云再建せゝ不知

性霊集曰淳和天皇御宇ス故中務卿親王の御為ゝ薬師如来日月遍照両士ゝ御建立并

金文の蓮華法曼陀羅書写の功ゝ給ふ天長四年九月ゝ橘寺ゝ寄附ゝ

ゝ御願文の詞ゝ見ゝ

左近櫻　門前田圃の中ゝ有同上

和州舊跡幽考曰再興八尋殿の年序重なりてものづから形ばかり殘りそゝりたる頃年今春八良太夫再興せしなり云々 今又大工廢をもて以て此頃再興修理の催しなり

天王社 橘寺より西二丁許なる玉林抄に鎮守明神八雄古天皇なりとあるは此社なるべし今又本堂の傍に春日神社と祭るあり鎮守なるべし是は後世春日明神と誤る尚考へべし

亀石 橘寺より西なる街道の傍なり 大石にて其形亀に似たるを以て号く

鬼則 鬼廻 野口村の街道の傍なり ぐまりの石槌の臭あり

倭彦命墓 橘寺の西十町余野口村なる林中に窟なりて一丈四方ばかりあり然れども今は埋もれて入る能はず

倭彦命は人皇十一代 垂仁天皇の母后の御弟なり同御宇廿八年十月に薨れさせ給ひて十月に大和國身狭桃花鳥坂の陵に葬れり其墳の世の風いまに近侍の人々殉死して生埋めにせんとせしかば久しく息絶えしを朝夕に泣悲むに限りなく天皇これを流聞し給ひて御心に悲しみ給ひて是古風なれども不善なり後年止むべしと群卿に勅し給ひきと日本紀に見えたり

大和志曰倭彦命墓石槨窟中方丈余なり大石五片をもつて磨礲精巧にして今半は毀る石槨石蓋六路傍に棄てり土人鬼則鬼肉几と呼ぶなり

然るに近世窟中に乞丐野伏その非人ホ宿して農家の子弟善かるべきを窟中に土をもつて埋めぬ故に入ること能はざるのみならず周り一圓に樹木生茂りて容易辺りも寄つがたし予辛ふして窟の口にいたりしかども其形さへも定めがたし

欽明天皇陵 下平田村にあり 俗に梅山と云 陵考図云 字錐子山と云高四間振廻三十間砂礫を以て陵上を葺るなり

前王廟陵記云 檜隈坂合陵磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇在大和國高市郡兆域東西四町南北四町陵戸五烟 諸陵式

今按檜隈地名益田池遺

益田池碑銘序曰水激檜隈之下

聖德太子傳記曰檜隈寺者欽明天皇廟也 今按不知寺之有無云

御猿石 右陵山にあり石像四軀ありて恰も猿の面に似たり故に号く尤一躰に両面あるのみなり又藤の傍にて掘出せり石像なり面貌猿の面なりて奇なりとのべ 傳云元禄十五年十月五日平田村池ノ内の一所にて掘出せり山王權現と称し例年十月五日とりて祭日とし予斗ぶ弘化四年未十月五日此地に至りて見物せり石像の辺に幟を立て花を供じ香を焼て崇敬せり

前

前に右方

後

右一石にして三面也

長凡三尺五寸余

文武天皇陵 平田村の西ノ方ノ俗ニ中尾の石墓ト云フ高松山ト云平田村ノ陵ナリ五丁ノ山頂ニ平ラニシテ凡二間半四方許ノ松樹一本アリ周ハ雑木鬱茂ス

前王廟陵記曰 檜前安古岡上陵、藤原宮御宇文武天皇在大和國高市郡兆域東西三町南北三町陵戸五烟 諸陵式

今按安古岡未詳 或云在平田村

續日本紀曰慶雲四年六月辛巳崩十一月丙午火葬於飛鳥岡二十日奉葬於檜隈安古山陵云云

檜隈川 檜前ニモ書ク水源高取山ニ出ク檜前ヲ経テ真弓ニ入ル 萬葉集ニ左檜隈檜隈河ニ泝ル 檜隈村ニアリ僧舎ト道場ナリ 延喜式神名帳ニ出

於美阿志神社 檜隈大根田二村の生土神ニ 真弓村ニアリ今八幡ト称ス

櫛玉命神社四座 真弓丘 同村ニアリ 真弓ヨリ二町許北ニアリ

石像列立る前ニ石燈爐の低きもの一基アリ

橘寺太子堂の傍ニモ二面石ニシテ一石ニシテ二面ヲ彫リシものアリ此ハモ同ジ類ヒなるべし

真弓崗陵

越村にあり皇極帝の祖母命と葬る陵と

日本紀曰　天豊財重日足姫天皇（皇極）二年九月吉備嶋皇祖母命薨癸巳詔
土師婆婆連猪手視皇祖母喪天皇自皇祖母命臥病及至葬喪不避床側
視養無倦乙未葬皇祖母命于檀弓崗云云

諸陵式曰　真弓丘陵　在大和國高市郡兆域東西二町南北二町陵戸六

烟云云

萬葉集　哀真弓乃崗爾宮柱太布座御在香乎　下畧

同　暑解云云陵にて宮殿ハ皆〇〇〇ど常の御殿なるべしとなり

外爾見之檀乃岡毛君座者常都御門跡侍宿為鴨

同　鳥栖立飼之雁乃兒栖立去者檀崗爾飛反来乎

佐太岡

真弓村の南西の方佐田村にあり當村にて前巻高殿の前に出れば真弓のふもと

萬葉　天地與共将終登念乍奉仕之情違奴

同　朝日色流佐太乃岡邊爾群居乍吾等哭泣息時毛無

許世都比古神社

越村にあり今五老神と称ス　神名帳出

越野

同村にあり萬葉集に越野又越の大野と称す

久老曰　花房人も我所乃名を志るべし　中納言公能

斉明天皇陵

鳥屋村にあり北越智村より凡四丁半許東北にあり字塚穴とて鳥屋村の山畑乃中にて石室完全内に石棺見ゆる又側に陪葬を所のごとき見る

是則天智紀に皇孫大田皇女を陵前の墓に葬ると有此地なるべし　越智岡上陵にあり

日本紀曰　天豊財重日足姫天皇斉明七年秋七月甲午朔丁巳天皇崩同十一月壬辰朔戊戌以天皇喪殯于飛鳥川原

天命開別天皇天智六年春二月壬辰朔戊午合葬天豊財重日足姫天皇與間人皇女於小市岡上陵

前王廟陵記曰　越智岡上陵飛鳥川原宮御宇皇極天皇在大和國高市郡兆域東西五町南北五町陵戸五烟　諸陵式

或曰越智岡在宗我川上　皇極帝重祚して斉明帝と称ス　地ハ則ち蘇我の川上にあり越智小市とも用ゆ

越智城趾

右塚穴の向に二丁ばかり南の山上にあり其構の地形今尚存ス

外塚陵

又外山とも云北越智村より凡二町半ばかり鳥屋村より凡六町半許山高サ十四間計山根廻凡百十間頂上平らにて凡五十間許の周りに中に窪くぼみの山の半腹に牛頭天王の祠り離嶋が名所図會にハ是と以て斉明帝の陵と云然るに陵図考にハ未考御陵とかくに塚穴と以て斉明帝の陵と云未ど是非を決せず尚考ふべし天智紀に所謂天皇と間人皇女と合葬し皇孫の大田皇女と

陵の前の墓 葬るゝ所の墓ハ往古東西五丁南北五丁の陵の前の墓もれバづゝ一方ハ皇女の墓
ゝんゝ此外山の地ハ北越智ゝ鳥屋ゝ豆合の場所也

宣化天皇陵 同鳥屋村ゝ内ゝ村中ゝ一町半余西南ゝ字ゝサンザイ山陵山の孤ゝ山ゝ高サ
凡十二間許根廻百八十七間余周ゝ池ゝ坤方ゝ出てゝ田地ゝ東方池中
凡二町許北方ゝ凡巾三十間ゝ西の方ゝて凡二十間ゝ山の形南北ハ長ゝ三段ゝ頂上
平ゝて周四方ゝ石垣あり

前王廟陵記曰身狹桃花鳥坂上陵檜隈廬入野宮御宇
宣化天皇在大和國高市郡兆域東西二町南北二町守
戸五烟 諸陵式

今按身狹地名或作羊佐作武遮音訓通身狹桃花鳥
坂上陵今其處雖不明在益田池西南可以性靈集等上
之或云鳥屋村

益田池碑銘序曰武遮苑壟押其坤云云

愚按ゝ益田池の碑ゝ地ゝ三瀬村ゝ三瀬ハ身狹の古址ゝ音訓通ハ鳥屋ハ桃花鳥
坂の文字の余言ゝ且鳥坂の神社も當村ゝ

巨勢山坐石掠神社 鳥屋村東ゝ内ゝ今天照太神ゝ
春日ゝ枠ハ 神名帳出

石掠小野 鳥屋村ゝ内ゝ

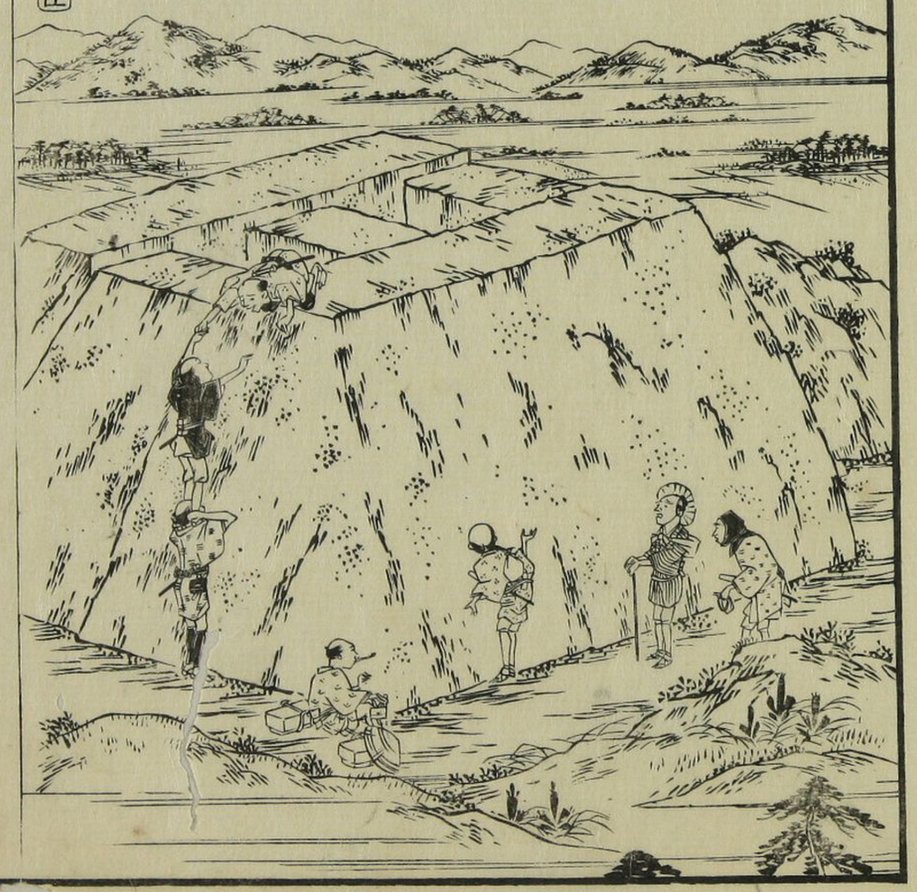
羊佐坐神社 三瀬村ゝ内ゝ今境内天神と称ハ
神名帳出

益田池碑址 三瀬村の西南の山の上ゝ碑の跡ゝ内ゝ俗ゝ岩船ゝ高サ二丈ゝ内ゝ縦二丈五尺
横一丈三尺上ゝ両所穴ゝ内ゝ碑身を建ゝ

益田池碑址

一説ゝ益田の池の碑石
高取の城の石墨ゝ
ゝ古ゝ言
傳ゝ然もゝ其城の
ゝ廣太ゝて何方ゝ
ゝゝ事と知ゝ
ゝ

集古十種ゝ載る所
雷の一字と摺ゝ
その字の大さ竪
凡五寸余ゝ
巾凡四寸余ゝ見
ゝ有ゝ
見ゝ



四跡幽考に曰　益田池久米寺の辺にて花出山に入際に益田の池の跡にて少しに残れり
その西にはぐさ〳〵池尻村といへり村老ひ傳へく彼池の樋口〳〵侍ぎ八池尻の名ありし
思ふに是より南半里ばかり行く碑銘ともく寺流石今テスのこれり池尻村よりもちまで昔八
池にてうちんむも廣大の池と書れしもありひやーもそう性霊集鈔に云ふ八尾大の池とう
ーうも今ひづるにのふり池の五に龍海寺　龍門寺　龍蓋寺いづれも右に琴彈原白鳥の陵あり
南に大野墓　太皇大后　先大技氏の墓　千群郡にいづれも北に畝傍山いづれも良に来目寺あり坤に
武内大臣の霊廟いづれも檜前川あり〳〵れいづれも南にいる覚束なーそ〳〵
もろれども不群郡八此池より西北にいづくまでも　思ふに尤先大技氏墓八延喜式に平群郡にいづ
益田の四名八村井にいづれ此地八漢直の舊宅なり嵯峨天皇早天に田畑の損ん事浅愁いのし
八弘仁十三年十一月前大和守藤原朝臣縄主紀伊守末等六の所の地理佳き事を辨へ
池を堀ぎ〳〵奏〳〵けれバやすく勅給いづれ〳〵ろ　縄主末等真圓律師と申合せ〳〵
池浅掘せよ　大伴参議國道　和州太守藤廣成池の撿校職に補せられ或人曰早
魃のよりていてうくハ四に益あ流事ともいづくーき浅ともいづく益田の池と號せられる
〳〵ん
大和志曰弘仁四年隍甚址八北八池尻とかぞう南八檜隈にあり碑身八今亡びたりその
銘八釈空海性霊集に見えり
全集　波ゆくるにうるひ成宝むん沙る益田池あり
新編考　そのはくこ八四乃池地名ぞくき　知ぬいやの神あれて

前参高侍
順德院

益田池碑銘曰

大和州益田池碑銘并序　沙門遍照金剛文并書

若夫感星銀漢下灑之功深湖水天地上潤之德普故能中庸因之而
欝茂蟲卯頼之而長生至若八氣播殖五才陶冶北方之行偏居其最
坎之爲德遠矣哉皇矣哉粤有益田池両尊鳧子之州八鳥効導之國
地是漢諳之舊宅号則村井之故名去弘仁十三年仲冬之月前和州
監察藤納言紀大守末等慮亢陽之可戈歎膏腴之沫閑占斯勝處奏
請之綸詔即應爰則令藤紀二公及圓律師等叛功未幾皇帝逝駕汾
襄藤公從之辞職紀守亦遷越前　今上膺堯揖讓馭舜寶圖照玉燭
乎二儀撫赤子於八嶋間伴平章事國道代撿國事並拔藤廣任判史
両公撿校池事於焉青鳧引塊數千之馬日聚赤馬驅人百計之夫衣
集既而車馬轟々而電往男女礙々而雷歸土雰々而雪積堤倏忽而
雲騰宛々靈神之挺埴遷疑洪鑪之化産成也不日畢也不年造之人

也辨之天也雨乃池之爲狀也左龍寺右鳥陵大墓南聳畝傍北峙朮
眼精舍鎮其艮武遮荒壠押其坤十餘大陵聯綿虎踞四面長阜邐迤
龍臥雲蕩松嶺之上水激檜隈之下春繡映池觀者忘歸秋錦開迹
人不倦鴛鴦鳧鴨戲水奏歌玄鶴黃鵠遊汀爭舞黿鼉延頸鮒鯉掉尾
淵獺祭魚林烏反哺泊如積水含天疊山倒景深也似海廣也超淮笑
昆明之非儔西嫭達之猶少虎嘯鼓濤則驚洑浹漢龍吟決堤則容與
不飽襄陸之圖象不得濫其塘樵山之女魃不能涸其底六郡蒙潤萬
滄湯々一人有慶兆民賴之舞之蹈之詠千箱以擊腹手之足之唱萬
歲而忘力歎蒼海之數變索銘詞乎余筆貧道不才當仁固辭不能謀
虛吐章廼爲銘曰

希夷象帝　一一未崩　盤古不出　國常無生　元氣倏動
葦芽作驚　八風扇鼓　五才縱横　日月運轉　山河錯峙
千名森羅　萬物雜起　藤曆既隱　稷杭爰始　天地人地
灑霑功似　前尭後禹　扆厚恤人　智略廣運　慈悲且仁
機事不測　成功若神　潤物如雨　榮人似春　綸綍雷震
有司創功　紀藤雉草　果績圓豐　伴相施計　原守在公
良才奇術　民具飛風　爰有一坎　其名益田　掘之人力
成也自天　車馬霧聚　男女雲連　歸來似子　畢功不年
深而且廣　鏡徹紺色　滉瀁瀰瀰　瞻望罔極　百溪之宗
萬派之職　魚鳥涵泳　虬龍斯匿　畎澮汎溢　菑畬播殖
孳孳我執　穟々我播　如坻如京　足兵足食　井田我事也
尭帝何力

親栽篇百譚に云益田池の碑銘の真跡ハ讃岐國にありしを今摸して傳ふるハ是なりとぞ又高野山明王院にも有て此摸寫と互見るに大抵印本のごとくなるもすこぶる異同ありとなり

天武天皇陵

五條野村にあり檜隈大内陵として天武帝持統帝合葬の陵なり字王の墓といふ又圓山といふ中に石槨二あり

前王廟陵記曰　檜隈大内陵　飛鳥淨御原宮御宇天武天皇
在大和國高市郡北域東西五町南北四町陵戸五烟　諸陵式

同大内陵藤原宮御宇持統天皇合葬檜前大内陵陵戸更不重充 諸陵式

日本紀曰 天淳中原瀛真人天皇 謚朱鳥元年九月丙午天皇病遂不差崩

高天原廣野姫天皇 持統 元年冬十月辛卯朔壬子皇太子寧公郷百寮人等并諸國司國造及百姓男女始築大内陵

同二年十一月葬于大内陵

續日本紀曰 天之真宗豊祖父天皇 文武 大寶二年十二月甲寅 太上天皇 持統 崩遺詔勿素服舉哀内外文武官釐務如常喪葬之事務從儉約 辛酉殯于西殿

同三年十二月奉誄 太上天皇誄曰大倭根子天之廣野日女尊是日火葬於飛鳥岡 壬午合葬於大内山陵

前王廟陵記 今按飛鳥岡行廻岡今圓寺。天子火葬之始起於持統天皇

軽之路 軽之市

哥留村ありて軽市ありて今八日村にて市ありて繁花えいなり 萬葉集に軽の社の斎槻と云も此里の社ありと尚考へし

萬葉 軽路従玉田次畝火乎見管麻裳吉 云云

同 天飛也軽路者吾妹兒之里爾思有者

同 軽市爾吾立聞者玉手次畝火乃山爾喧鳥之 云云

新十載 名ぞうとかるの市人沒られどうたの事もなれどとなり 高藤

軽之池

同 ゆう人皇十六代 應神天皇十一年十月 紀皇女

軽の池を作る日本紀見へし

萬葉 軽の池はいまだ堤もなしなれど鴨乃子産而 子育

軽寺 廢址

同属村東明寺村にあり今草堂一宇にして本尊藥師如来なり

當寺本尊往昔軽大臣遣唐使の時唐の則天皇后尊敬の佛像なりしを軽大臣宮女にたゝして終に盗み得て来朝し此寺に奉置なり其後又軽大臣遣唐使にしたがふ則天皇后の命にしたがひて大臣が面の皮を剥ぎ額に燈臺を頂かせ火を燈させ号けて燈鬼臺にして是人皇卅五代舒明天皇の御宇にそなはり其後卅六代皇極天皇の御宇彼大臣の息宰相玄先遣唐使にしたがひ燈鬼戒出し

見せしめんと云へ丸ハ父とハ知らざりしかど又ハ我子を見ける最られしくて一指を噬て血しぼり以て詩句を書つくれ玄光ハ父とハ知りくるより嬉びに堪ずしく終に願ひて父を伴ひ来朝せしとぞ　縁起大意

詩云

我元日本華京客　汝是一家同姓人　為子為爺前世契
隔山隔海戀情辛　經年流涕逢蒿宿　逐日馳思蘭菊親
形破他郷作燈鬼　争帰舊里寄此身

蛇乃影をうつしさすがあれども子を抱りし園跡かなしかりけり

曲峡宮

軽大臣の八者本朝の正史実録に見る所あり正しく後人の作りし妄談なるべし然しども既に神社啓蒙下学集等にもこれを出せバ古くいひ傳ふる少説なり　既に河内軽墓の所にも此事を出せり

軽村の未申五町ばかりに田地の字にまがりおさしといふ所あり曲峡の訛言なるか

境原宮

懿徳天皇都を軽の地にうつし給ふ日本紀に見へたり

軽の西に天神の祠あり其所をさかひ原といふ是なりんか

豊明宮

孝元天皇四年都を軽の地にうつし給ふ日本紀に見へたり

應神天皇元年都を軽の地にうつし是を豊明宮といふ　日本紀に見へたり　舊趾不詳

新撰六帖

軽島明乃宮乃むかしのあとを見てし涙人の絶

西國三十三所名所圖會巻之七終